校友會雜誌

第貳拾壹號

山口縣立萩中學校校友會

大正十一年十二月發行

山口縣立
萩中學校

校友會雜誌第貳拾壹號

山口縣立萩中學校

校友會雜誌第貳拾壹號目次

○題字　松陰先生筆蹟拡大撮影
修養……一頁
○告辭　會長　岩田博藏
○孔子の教育觀　特別會員　石川修三
○同德會に就て　同　河野運毅
英文……一五頁
○The Future
○The Outlook
○The Bubble
○和文英譯「諫言の聖」
卒業生通信……二〇頁
○關門高工入學試驗に就て　藤原敏男
○四高より　三浦一夫
○熊本高工より　長嶺幸三　西村正人　東一郎
○神戸商船より　羅原行德
○明專より　宮國秀彥
○神戸高商より　神田藤治
○大阪高工より　河村東一
○京都醫大醫科より　長井博通
○慶大より　隅元保
○神宮皇學館より　田中清　中原義胤
○萩明の同志社大學　恒石八郎
會報……三貳
○修學旅行記　會長　岩田博藏
萩より吳へ　四年　田原節夫　寫眞撮影
吳より廣島ー宮島　同　大山岩夫
宮島ー山口　同　青木弘
山口ー長門峽ー萩　同　東島靜男
○階學生の動靜　三年　野村久一
○噫、矢田部君友君　五年　田邊　河上　玉木　村上
○寄宿舍生活に就て
○運動競技講習會に關て
校報……四七貳
○卒業式○卒業生就兒○生徒褒勵規定受賞者○學制變革記念式○先生の更迭○學友會幹部○校誌
會報……五貳
○長距離競走○庭球部○野球部○蹴球部○柔劍道部○寮都演武大會○山口體育大會○地理部○書道部○基道部○理科部○陸上運動大會○寒稽古出勤表○各中隊學科成績○中隊幹部○校友會役員○校友會收支決算○寄贈雜誌
附錄同窓會記事……一貳
○高梁より　第三回卒業生　玉木正行
○五高通信　第廿一回卒業生　篠原智雄
○海軍志願中の會員　第二回卒業生　阿武清
○同德會誌○基金募集○會員統計○會計報告○會員計報

山口縣立
萩中學校

校友會雜誌第貳拾壹號

修養

校長告辭（大正十一年三月卒業式に於て）

最も親しむべき卒業生諸君と、今日お別するに當り一言致します。諸君は諸君の一生の中に於て、解決を着けねばならぬ大問題があるのであります。其の問題は「二大事件は兩立するや否や」といふことであります。今より約三十年前に、佛蘭西のドモランが、「アングロサクソン人の優越」と云ふ書を著しまして、將來の世界には、アングロサクソン人種が必ず優越の地位を占めるやうになると云ふことを申しました。さて歐洲大戰後、露・獨・墺等の國は倒潰の狀態でありまして、勝利を得た佛・伊等は、負債に呻吟して居ります。英は勝利を得たには得たが、戰前六十億の債權國であつたものが、戰後八十億の債務國となりました。併しながら諸君がよく知る通りまだまだ根力があります。領土が廣く富根が豐なので、必ず遠からざる內に相當の恢復が着く見込であります。獨り米國は四百億の債權國で、これまでは世界の金融市場は、英國の倫敦といはれて居つたが、今度は米國の紐育に移つたのであります。戰後世

界に大を稱する國は、ドモランが三十年前に豫言した通り、アングロサクソン人の優越となつたのであります。ドモランは果して歐洲大戰亂が、三十年後に起るかどうかと云ふ事を知つて居つたか否かは分らぬけれども、豫言の結果は實現したのであります。此の大戰亂の結果として、戰爭に使用した金の利子だけでも五百八十五億であります。日本の如き國からば三十八箇國の經濟が立ちます。此の戰爭で負傷者三千九百万人死者二百万人（ざつと東京の人口）ありました。而して激戰のあつたヴエルダンでは、一メートル四方の地の中に鐵が一噸半埋つて居て、一人の足下に三人の屍がある割合で、誠に非常の打撃を天下に與へて居ります。此の如く今日の戰爭は多額の金を消費し多數の人命を損するのであります。斯る大禍を招來したので、そこで今回華府會議が開かれたのであります。これは確にアングロサクソン人が目覺めたのであります。所が彼の英國のバーナードショーは之を批評して、戰爭するものは武器でなくて人である。潛航艇速射砲はなくともネルソンやナポレオンは戰爭をしたのである。假令武器を制限したからとて世の中に戰爭が絕えるといふことはない。して見れば華府會議が果して意味あるかと云つて居ります。これが二大事件の一の問題であります。

諺に出る杙は打たれると云ふ事があります。さて生きて居る者は生存の權利を有します。天地の攝理に從つて生れ出た者は此の世の中に立つて生きて行かねばなりませぬ。所が白人種は自分の力附で勝手に領土と富源とを恣に占めて居ります。そこで今日世界の人間は、彼等の爲に極めて生存權を脅威せられて居る。その中でも一番影響を蒙つて居るのは日本人であります。抑生存權は衣食住の資源問題であります。今や世界の人民は一平方哩の內に三十人の割合で分布されて居ります。生存權の平等を保つ爲には

はこれが適當であります。所が日本の現在の狀況によりますと、日本人を收容するには、今より十五倍程の大さの土地が入用なのであります。此の如くして始めて國民の平衡が成立するのであります。諸君我國がかくまで縮小せられ居るのは誰の爲でありませうか。實際によりますと一平方哩の內に、自耳義（土地平坦にして豊饒である）は六百六十人、和蘭（土地平坦豊饒）は五百四十一人、日本（山多し）は三百九十九人、（米國の十三倍位）英本國は三百七十七人、（他に多くの領土あるを思へ）伊太利は三百三十二人、支那は二百八十八人、米國は二十九人、濠洲は僅か五人であります。此の如く世界各國の一平方哩に於ける人口を比較しますと、生存權は平衡を保つて居らぬのであります。これは確に一大問題であります。日本では我々の常食とする米は、一人に約一石（二俵半）の割合しかない。所が土地を開拓して田地としやうにも、我國ではもう此上少しの餘地もないのであります。而して人口は年々六十万人宛增加します。此の割合で行くと五十年後には我國は一億人を包擁して生存權を維持して行かねばありませぬ。これ位行詰つた國民は世界にありますまい。前途を思へば實に心配なことであります。然らばこれを救濟するには如何にしてよきか。此の生存權を維持する爲にはどうしても海外に溢出せねばなりませぬ。海外に雄飛する必要があります。此の雄飛する地方は果して何處が適當でありませうか。北米か南米か將濠洲か滿洲か。宜しく世界の實狀を明にして如何なる方面がよきかを考究せねばなりませぬ。一方に於ては戰爭はよすと云ひ、又他方に於ては我國民の如きは海外に溢れ出る杙は打たれても海外に雄飛せねばならぬのであります。これが第二の問題であります。平和協定と日本人の生存權。諸君の一生に此の二大事件が兩立する

か否か。よく考へて解決せねばならぬことと思ひます。此の問題を解決するには諸君は十分の修養を積まねばなりませぬ。十分の修養を積んで此の二大問題を解決することは私の諸君に希望して止まない所であります。終に臨みまして諸君の幸福と健康とを祈ります。

孔子の教育觀

特別會員　石川修三

以下に記すことは私が嘗て物した小論文の中から、其の一小部分を抜萃したもので、孔子の立場並に教育に對する考を闡明した積りである。

支那の傳說によつて考へて見るに、伏犧氏の時代は牧畜時代、神農氏の時代は農業の始めて起つた頃であつて、毫も精神的文化の萠芽を見出さなかつた。しかして、この頃は未だ物質的文明に忙はしくあつて、唐虞三代（夏、殷、周）の間に文明が進み、時代の經て黄帝に至つて、漸次其の緒につき、引き續いて、過につれて傳說的の道德は其の時代時代に當嵌らなくなつてきた。しかして周代の末になつては內には王室の祭祀が衰へ、外には夷狄蠻戎が迫つてきて種々の困難が生じた。それが當時の識者の反省を促して、こゝに春秋戰國時代の所謂啓蒙時代を現出した。

物質的文明
伏犧——神農——黄帝——唐虞三代——周末啓蒙時代
精神的文化

この啓蒙時代にあたつては、精神的文化は歷史的に發達したのであつた。これに二つの異る主義を生じた。かゝる區別を立てるは獨斷的の譏を免れぬがも知れぬが便宜上以下の如きものならんと思ふ。即ち消極的の反歷史主義と積極的の歷史主義とである。消極的の反歷史主義とは從來の傳說習慣に對して消極的の態度を取つてこれを破壞し、極めて單純なるものに復歸せしめんとするものであつて、其の思想の代表者は老子で、其の思想の繼續者と見做さるゝは莊子である。十八世紀のジャン・ジャック・ルソーの思想もこれによく類似してゐる。これに反して積極的の歷史主義といふのは古い文化の中から、材料を取つて、それを自分の力に於て取捨選擇して適當なるものを取つて、更に新なる文化を建設せんとするものであつて、代表者の第一人は實に孔子其の人で、これを引繼いだものは孟子であると思ふ。

さて孔子は從來の習慣的道德を醇化して其の中から將來の準則となるべきものを發見したのである。即ち孔子は孔子以前の支那思想を醇化して古の眞髓を自己の人格中に體現して己れ以後の支那思想に一定の方針を與へたものである。故に純粹に支那的たりといふことが出來る。その空理空論を避けて實行を尚んだこと「述而不作」といつたことなどは其の國民的思想を表してゐる。孔子の教は一言にしていへば、仁を以て本として、論理整然たるものであるが、門弟子の問に答へた所を見れば人毎に異つた答を與へてゐる。これは個性教育に留意したとも考へられる。仁といふことは衆善の宗である。歐人のいふ所謂最高善そのものである。即ち人の人たる道である。論語に「參乎吾道一以貫之」といふことがある。曾子が之を解して「夫子之道忠恕而已矣」これによつてこれを見れば忠恕を以て根源とし仁を以て終局點としたのである。而して教育の目的とする所は明かに道德至上主義である。その極意は仁でこ

れが教育の第一義で他の文藝は第二義である。即ち教育の根本義を仁即ち至善今の言葉に直せば、最高善、或は總ての善を統一するもの、善の本躰、生活の理想に置いて文藝は第二次的のものと見てゐたことは次の文句でも明かであらう。「志於道。據於德。依於仁。游於藝」又曰く「弟子入則孝。出則弟。行有餘力則以學文」と。教育の方法としては温故知新といふことが仁を致すには必要であるといはれた。私はこの温故知新といふ解釋を便宜上原因、結果の關係と見て古の事を尋ねて今の事を知ると見るものである。しかして温故知新なるが爲めには客觀的なる學問、主觀的なる思辨の二つが必要である。「學而不思即罔。思而不學即殆」。又「吾嘗終日不食。終夜不寢。以思無益。不如學也」の如く、この兩者を共にしてこれを實行の力によつて行爲の上に表さなくてはならぬ。即ち學問ありて思辨なき時は霧中の花の如く、朧夜の月の如くに茫として明瞭ならず。思辨ありて學問なき時は闇路に燈火なくして行くが如くにたゞ〳〵しく疑はしいものがある。

材料蒐集　理解　實行
「博學之。審問之。愼思之。明辨之。篤行之。」

これを見ても「篤行之」とは實物の必要なることを述べてゐられるのである。即ち現時の言葉をかりていはば教授材料の蒐集は廣汎なるべし。理解せしむる樣に教授せざるべからず。即ち胃弱の時に、齲齒の病人が嚙み碎かずに食物を無暗矢鱈と入れこむやうで、消化しないで排泄せられても何の効力もない。むしろそれ以上に恐るべき害があるといふことを暗示せられてゐる。即ち我々が材料を得てこれを理解するといふ中には、其の前提に實行といふことを豫想してゐる。よつて我々は實行にあらはさるべき材

料を蒐集すべきであると考へさせられる。以上は教育方法の一要素としての材料蒐集、理解、實行といふことを述べた。次に孔子は如何なる主義方法によつて三千の弟子を教育したかといふに、一言にしていへば道德的人格主義である。換言すれば道德主義と人格主義との二つである。何となれば仁を理想とし其の道德的修養を骨子とせる所は道德教育主義であり、各人の人格をして其の長所に向つて發揮せしめんと企圖せしめんとした點は、明かに人格的教育主義其のものである。此の人格主義は自ら個性本位の教育法を呼び起さずにはやまぬものである。これは孔子が教育の實際に當つて弟子其の人によつて其の問に對する解答を異にしてゐる點あるを見ても明かである。即ち仁といふ定義も左の如き三種の解答を異にせられてゐる。

(1)(イ)材を達す
　(ロ)失を匡す
(2)三段教法(イ)道理
　　(ロ)名譽
　　(ハ)利害
(3)文章、性天道

又孔子の教育主義中からは開發主義的要素が見出される。例へば一端を叩いて他端を知らしめ、一隅を擧げて三隅を思ひ起さすといふが如き方法である。隱つて正面から「何々なり」と言つて說明するやうなこと稀である。尙孔子は仁を理想としたものであるが、それには即ち質實なる性格を作ることを作ることが必要である。これは文飾を待つて始めて圓滿なる發達をなすものである。即ち質勝文則野。文勝質則史。文質彬々。然後君子。

これによると質實なる性格のものは君子である。しかして君子といふものは如何なるものかといふにこれは二要素に分けることが出來る。

君子{質（道德的意志を有してゐること）——德行
　　{文（柔しく行儀よく言葉遣ひが上品で艶あること）——禮樂

これを見ても君子に美的修養の必要なることを說いた思想が見ゐる。孔子の所謂美的修養とは詩書禮樂を學習することである。即ち現今の言葉でいへば文學上及び美術上の趣味を養成することである。趣味の養成は君子の一特質で沒趣味漢は君子たることが出來ない。然れども君子の特色は趣味を有するのみならずしてこれより一層高き德行これである。孔子が「吾從先進」といひ「文質彬々」といへるはこの意に外ならぬ。現今西洋かぶれをして盛に趣味教育とか藝術教育とか唱へてゐるが、二千年前に孔子の道破してゐる所である。要するに美的教育をやつてゆく間に道德を進めんとしたものである。尙は現今重んぜられてゐる體育についても相當意を用ひられた。即ち古昔六藝の中にはすでに體育の事を寓してゐるが、衞生のことについては鄕黨篇食不厭精の一段消極的ながらその一斑を見ることが出來る。次ぎに孔子の用ひし敎科或は孔子の倫理觀等についても多少材料はあるが紙數の都合上これで擱筆しよう。

附、

孔子の倫理觀を研究せば愈明瞭に確められるのであるが、孔子の言を聞いて痛切に胸臆に銘じ得るものがある。それは何によるか、學者の說としてではない。其の高潔なる人格の響から感應するのである。泰山は千古の容を存し、江流は萬歲の水を留めてゐる。孔子の活きたる人格

も亦かくの如きものである。彼の王朝幾度か變せしも一貫の仁敎は天地と共に無窮である。孔夫子亦瞑すべきである。この道を萬世一系の皇統を戴ける吾々が國體に融和して、其の精神を得て、處世の儀となすことが出來る吾々も亦多幸なる者である。

書孔子研究後。

我國民道德之冠絕於宇內、不須言也。其精髓、雖素存我古神道之大義。而潤飾之者、以儒佛二敎爲主。是萬人之所認也。然而孔子祖述堯舜、憲章文武、正是儒學之宗也。禀生知安行天縱之資。其接人也、溫且恭儉讓。其風貌也、溫厲威安。而其敎旨也、文行忠信。斥空言、重實行。以克己復禮博文約禮、爲道德實踐之綱領。闡明性與天道、爲人生之至極。且述吾道、一以貫之。仁說之、高遠妙諦。顯現夫子之人格也。垂聖敎、以傳於後世。眞可謂百世之師矣。

夫子生於春秋爭亂之際、以行王道、爲畢世之大任。而遂不能果其志也。敎門弟子、以道之所由。孜々不倦、吃々不忘。其體深淵、雖智者不易窺。而其用在日常之間、雖愚者可能之、我邦夙學夫子之遺敎、上下由之、風俗醇厚、忠孝仁義之道愈明、世濟美風。悠々綿々、蓋二千餘年於茲矣。蓋夫子之去不行於彼却、而行於我。在彼易姓革命、顚乱相繼、夫子之道無所行。在我則萬世一系、皇統無窮、君爲君、臣爲臣。素可資事父事君。忠孝一本、國體以立。夫子而有知、則必喜遺敎之行於皇國矣。

野州後學石川修三識。

同窓會に就て

特別會員　河野通毅

いつか好機會があつたら在校生諸君の了解を得て置きたいと思ふたので、校友會雜誌の發行を利用して、

我々が組織してゐる同窓會の目的、性質を紹介して置かうと思ふ。

同窓會設立の目的は、會員相互の親睦と、母校事業を後援する教育別動隊となるといふことが主要なるものである。この目的を達する爲に本校卒業生全部と、教職員、及嘗て教職員であつたものを網羅して組織せられたのである。元來學生時代の友情を永遠に保持し、時々相會して舊交を温めるといふことは人情の最も麗しい點である。竹馬の友は永遠に慕しいものである。そして此等の人々が相集つて母校の隆盛を希ふといふことは、人情の根柢に奥深く潜んでゐる、美しい情といふてよい。私は此に同窓の友が相集つて、麗はしい會合を開くといふことに就て、最近一の佳話を新聞紙から聞かされたのである。それは米國のアナポリス海軍兵學校の同窓會を日本に開いて、同校の卒業生である瓜生海軍大將が、同窓の友米國海軍卿デンビー氏其の他を招いたといふ事である。此の同窓會は四年に一回づゝ開かれるので、瓜生大將は同窓會に列席する爲、二回も渡米せられた。今回は第十一回目の會合を、日本で開かれたのである。人種を異にしても同窓生は懐しい者である。況んや大抵は山口縣出身である我が同窓會員は、是非とも一の團體を作る必要があらうと思ふ。

目下本校の卒業生は一千二百六十五人ある。其の中約一割は物故せられたが、然し可なりの多數である私は同窓會の標語として「多數は力なり」といふことを標榜したいと思ふ。卒業生の中には可なり成功した人もあるが、然し之を打て一丸としたならば、それは大なる力となるであらうと思ふ。藩祖元就公がいはれた「百打一心」とはそれである。そこでこれら卒業生、即ち同窓會員が團結を鞏固にするといふことは、最も緊急、且重要の事であらねばならぬ。

ろこで先第一着手として、此の一千二百人が意思の疏通を計り、感情の融和を策する爲め、相會合する。毎年一回八月八日には大會を開くのである。然し之は毎年一回位では充分でない。もつとしば〳〵開く必要がある。ともかくもこんな理由で同窓會は出來たのである。此の大會を毎年八月八日と定めたのは八八の數で記憶し易く、且夏季休業中で學生の歸省する者が多いからである。今米國の大學の例を聞くに、米國の大學では、多くは國民的大祭日を以て同窓生の大會を開いてゐるのである。例へばコロンビヤ大學はワシントンの誕生日を以て、エール大學はリンカーンの誕生日を以て大會の日と定めてゐる。大會には或は校舍を參觀し、講演を聞き、歡談に耽る。ろして最後には校歌を合唱して閉會する。要するに國民的大祭日を以て定日とするのは、記憶し易く、集合に便利なといふ爲めである。我が同窓會の目的は、會則第一條に、「會員相互の親睦を謀り、兼て會員と萩中學校との關係を密にし、其事業を裨補するを以て目的とす」と規定してゐる。

次に同窓會の組織は如何かといふに、會長には母校の校長を推戴することになつてゐる。其の下に評議員十名がある。之は任期は二ヶ年で、大會に於て選擧するのである。評議員中から五名の幹事を互選するのである。之が萬事の世話をするのである。

目下本會の事業としては何をしてゐるかといふに、第一は會員名簿の發行である。之は毎年一回發行するのであるが、會員の住所の異同や、轉職、轉任等が多いので、中々困難である。それに會員が住所の異同等を通知して呉れないので隨分困るのである。第二に毎年八月八日には定期大會を開く。會員に不幸があつた時には弔問する。毎學年末に在校中の成績優秀な者に賞品を贈つて、學業の奬勵を計る。先

こんな事であるが、尙卒業生の死亡者の追弔會を行つたり、恩師の轉任の際記念品を贈つたりした事もある。

本會の事業としては上揭のことに止まらず、尙爲すべき事業は多々益々あるのである。幹部の者は色々の腹案を有してゐる、然しそれには多くの資金を要するのである。そこで目下は基金募集中である。此の基金募集が成功したら、本會の存在の意義は益々明確に、充分なる事業をなすを得るであらう。

次に本會の會計狀態は如何といふに、毎年の新入會員、即ち本校の卒業生が入會する時、入會金として金貳圓を納入する。之で一生涯會費を收めなくてよいことになつてゐる。そして毎年一部の名簿だけは貰はれることになつてゐる。本會には此の入會金の外には一文の收入もない。そして毎年一部約三十錢位の名簿を配付し、其他多少の費用を要するから、現今では毎年缺損となる勘定である。然し創立當時に一時に從來の卒業生から二圓の入會金を徵收したから、其の金で補塡し得らるゝから、目下は差支ないが、今二三年の後には破產の外ない。そこで本年八月評議員會及大會開催の時、基金募集の件が企てられたのである。基金の事に就いては學生諸君には關係がないから、省略して置く。

卒業期の近い學生諸君の爲に、私は同窓會に對する將來の希望を述べて見たいと思ふ。之は私一個人としての愚案であるから、他の幹部の人は如何に思はれるかは知らぬが、とにかく私は次の如き考を有してゐる。

第一、同窓會の本部は萩に置くといふ事が、必然的に必要であるが、其他各地方に支部を設けたいと思ふ。今米國の諸大學の樣子を調査したものを見ると、大抵の大學は同窓會(Alumni Association)が母校

にわつて、其の他同年度の卒業生が組織する同級會(Class organination)がある。又各地方にあるものは多くは俱樂部の名稱を以て團結してゐる。或は學校に依ては同一職業に從事するものが相集りて一の會合を作つてゐる。概して米國の大學は、歐大陸の大學よりは同窓會の組織が發達してゐるさうである。私も何とかして此の支部の組織を發達せしめたいと思ふ。殊に上級學校の所在地にありては、其の地に遊學する新卒業生の世話をする樣にして貰ひたい。唯此に困難な事は、學生をのみ以て地方支部を組織すると、新陳代謝が激しいので、中心人物となる人を得惡い事である。然しともかくも此の組織は地方會員の一大奮起を以て、各地に設立して貰ひたい。幸な事には東京には口羽雅介君(第三回卒業)や、下瀨幸男君(第十五回卒業)の如き有力の人があつて、指月會を組織し、大阪には岡村喜與君(第一回卒業)や杉道助君(第三回卒業)の如き中心人物があつて、之も指月會といふ名で團結してゐられる。現に今回の基金募集に就ても、岡村君は大阪の指月會の方を纏めて應募する樣運動してゐられる。

第二、それから連絡機關として會報の如きものを發行したい。尤も之には可なりの資金を要する。どうしても各地方の會員を連絡し、結果を强固にするには、何か機關がなければならぬ。私は嘗て東京遊學中に、指月會雜誌を發行したが、何分にも資金の都合で永續しなかつた。

第三、毎年一回の大會のみにては、會員相互の融和や、理解は計り得ない。此の會合は多ければ多いほど效果はある。殊に古い會員と、新しい會員とは年齡や、職業や、趣味や、色々の點に於いて大なる逕庭がある。そこで充分胸襟を開いて歡談するに至るには、年一回位では少いのである。

第四、卒業後に歸省するとか、出萩するとかいふ時には、一度は必ず母校の門を潜つて貰ひたい。之は

師弟の情誼とか、報恩とかいふ倫理的問題の外に、會員の結束の上からいふても必要である。少くとも年に一回の年賀狀位は、母校や同窓會に出して貰ひたい。

余り多くの希望をいふても實行の困難の事は何もならない、唯要は會員各自が相互扶助の心を失はぬやうにさへすれば、どんな事業でも出來るであらうと思ふ。現に第一回卒業の岡村喜與君の如き、色々の點で盡力して居らるゝのである。どうか諸君の卒業後は、同窓會の一員としても、充分努力せらるゝ事を望むのである。

（十一年十月三十日記）

◎統計のいろ〳〵

○生徒通學道程に就て。第一學期末に、本校生徒の通學道程に就て調査したに、徒歩通學にて最も遠距離なるは、往復三里半自轉車にて最も遠距離なるは往復四里、徒歩にては十町乃至十五町（往復）の者が最も多く、自轉車にては、一里廿町乃至二里十町位（往復）の者が最も多い。遠距離通學の生徒と近距離通學の生徒との學業を比較するに、大した差異はない。

英文

STRAY-NOTES

By Yoshio Hara, V., B.

THE MIRROR

Whenever I see my image reflected in a mirror, I feel my real existence. There I am, There wink my eyes! There move my brows! There smile my lips! Yes, they are all mine — my own eyes, my own brows, and my own lips. There I am! And I whisper in my mind, "Oh, God! I am really alive."

I

I have more interest in my inner life than in the outer world. This means, I think, that I have little power to push along among my fellowcreatures, but I have to be content to deal with myself only. Formerly I was so ashamed of my weakness that I often reproached and scolded myself, trying to stir up my spirits. But at last I have come to the conclusion that to spur on myself in such matters of self-humiliation —such sense of self-humiliation inconsistent with my innermost request, which never comes down to be led into casted shape. Thus the vain exertion has been shaken off.

EXERTION

If making efforts means to do something overcoming one's idleness, we can say that making efforts is not the only, still less the best, way to accomplish a thing. Almost all successes, in a true sense, do not lavish their energy to control their idleness, which can not be hindrance to their excution of purpose, because they work with keen interest they feel in the object in view. In fact, the geniuses' wonderful works have been done without any such efforts from their own standpoint. But people seeing their working diligently talk of their extraordinary efforts, and "efforts" means to work hard, while to make efforts does not always signify working hard. If the genius-

es have made efforts or have toiled in overcoming their idleness, their works would not have amounted to the highest. For the greatest work must be done by the whole soul. There admits no medium between the work and the soul.

GENIUS

Even mediocre men can perceive the conclusion of a proposition as well as a genius, just as every one can see the lofty, white summit of Mt. Fuji which towers into the clouds when he passes by its foot plain. But only he who has discovered and showed the world the way to its summit is praised and respected as a genius.

TRUTH

If there be any thing to be relied upon forever in the world, what would it be ? Would it be fortune ? Fortune is often lost. Would it be health ? Man must die. Would it be wisdom or knowledge ? It sometimes rots or becomes musty. Then what would it be ? It is truth of course.

In the armour of truth, with the sword of truth, riding on the charger of truth, straightly and steadily can we march forward, carrying everything before us. Truth is such a mighty thing. But sometimes there exists false truth, which is, on the whole, soon exposed by the light of real one. It is our duty to discriminate these sly wolves among sheep. The advancement of human race may be said to be the proceeding of opening the eye to the truth.

THE CRICKET

By Takao Tonno, V., C.

A summer evening, on my way home I searched about for a chirping cricket in the grass and succeeded in catching one for my little sister who is just four years old. The next morning when she got up I gave her the entomic musician in a tiny cage. She was very pleased with the present. She listened and listened, but the insect would not sing. Much disappointed, she demanded of me the explanation of the reason.

"It is too hot for it to sing its sweet song," I replied in joke. Upon this she ran out of the room and brought back a round fan with her and began to fan the cricket diligently.

"What is it for ?," asked I of her.

"I'm trying hard to cool it enough to sing," was the reply. And she continued her labour for a while, but of course the insect was not in the mood of singing. At last she grew tired with fanning and gave it up. Then she went to papa and importuned him to get her an electric fan for the purpose. Father all beaming with smile told her to wait patiently for the better day when he could afford to get a very good one for her.

"God knows when the day will come ! ", I chuckled to myself.

The Taishodo

By Isamu Imachi, IV., B.

There is a great stalactitc grotto known by the name of the Taishodo in Mine District, Yamaguchi Prefecture. It was discovered only a few years age, and has been taken good care of by the villagers since that time, so the inner parts of it have been kept in the same condition as it was first found without sustaining the slightest damage.

The grotto is divided into five rooms of different sizes, and three of them which are higher in position than the others are in the gross called the "Gokuraku", meaning the paradise of the world, while the lower ones are known as the " Jigoku " which means a hell. Everywhere in the "Gokuraku" we can see a great many stalactites hanging down from the ceilings, and under them numerous stalagmites standing close together as abundantly as mushrooms after rain.

There is also a place named "Hasuda", a lotus pond, where a great deal of lotus flowers are floating in the water. These are not real flowers, but white, round stones shaped like lotus flowers, which were formed by the drops of water containing carbonate of lime that dripped down from the ceilings.

In some rooms the whole surface of rocks is covered with fine ornaments which are something like corals in the sea, or mosses on trees. I can not understand how it is that the rooks show such a fine change of colours on their surface.

I have just related what the Taishodo is like setting aside the details. I wish all of my dear friends would make a personal investigation of it themsslves some day. I am glad that I had the opportunity of visiting the worldfamous grotto myself this summer.

和文英譯

豫言者の聲

豫言者は靜かに理をさゝやくか。否。多くの豫言者は高き聲を以て叫ぶ。神は死人をも甦らせ給ふ。靜かに人間に於ける死をも覺ませ給ふのではない。多くは豫言者にも高き聲を以てのぞみ給ふ。惡らつは言語や態度に於ても靜かなるものだ。おそらくその時は滅亡にひとしき衆の耳に、神の知らせがいかでかやさしき聲にて傳へられよう。星はまたゝいて靜かに、太陽は輝く。公明正大にそれは又更に美しい。自分は星を愛する。しかし生命の父なる太陽は更に讃美すべきものである。太陽は輝く。不太陽は萬物をつかさどる。

豫言者は美しい。しかし都の眞中に出て來て大聲に叫ぶものは更に美しい。

もしもそこの人ゝ萬の人類の、ことを心配つたならば、その聲は低くはない。雷のやうな聲をもつて、人々のうちに革命にも直接にさゝやいたにちがいない。聲の低き豫言者、自分はそれを理想的な豫言者とは思はない。自己の內にわき上る人類全體につく度へ思ふ心、こそ自然であり、又美しいのである。豫言者の聲は大きくあればある程讃むべきものである。

——武者小路實篤——

右英譯

THE VOICE OF THE PROPHET

Translated by Takamaro Fujita, V.,C.

Do prophet preach the truth in a low voice? No. On the contrary, many of them do it in a loud voice. God revives the dead, but not in a whisper. So he who awakes the dead soul of the living shoul do so in a loud voice. Probably Christ or Sakya was not a man of low voice. Nor did they refuse to preach in the presence of the public. I dare say in those days even those who were remote fron them could hear the solemn voice like that of God.

The stars twinkle above. They are silent, mysterious, and very beautiful. But the sun shines upon everything brightly and bluntiy. It is fair and square, and the more glorious. I love the stars. However, the sun, the father of all forms of life, is entitled to the higher admiration. Does he whisper? No, the sun throws dazzling light upon all things impudently as much as possble.

A recluse is noble, but he who sernonize in the centre of the busiest streets is by far the nobler.

If a man be heartily anxious about the welfare of hnman race, his voice can not be low. He will bring home or burn in even forcibly what he wants to say upon the very soul of others with a loud voice like thunder. The prohpet of low voice — I don't think him an ideal prophet. The words of humanity which swell and resound within and the zeal that wants to convey them to the whole human race are spontaneous and magnificent. So the louder the voice of the prophet is, the higher admiration it deserves.

——S. Mushakoji.

卒業生通信

本號より卒業生通信欄を設けました、卒業生と在校生との連絡をとる一助ともし、且卒業生が在校生を誘掖する一の機關ともしたいと思ひます。編輯者は今回本欄を設くるに當りて寄稿せられし諸賢の勞を多謝します。但紙面の都合にてなるべく玉稿を短縮するやう希望せねばならなかつた事を殘念に思ひます。

藏前高工入學試驗に就て

同校　藤原敏男

一、体格檢査　中學校に於けるものと異ならず

一、口頭試問　家庭の事情、志望、特に自己の好める學科等に就て質問あり。

一、學科試驗　數學、英語、物理、化學の四種を試驗するを常とし、稀に用器畫の試驗あり

1、數學、算術、代數、平面及立体幾何、三角法の五種に分つ。然し算術の問題も代數にて解きて差支なし。又近來幾何、代數、三角等を組合せたる問題の提出せらるゝこと多し。敎科書に就て定理、公式等を記憶理解し、問題集等にて多種の問題に當ることが肝要なり。

2　英語　英文和譯、和文英譯の二種なり。時には單語の英和譯等あり。

英文和譯としては南日氏の解釋法、キヤラクター、セルフヘルプの講義、ユニオン第四リーダーを推す。文の思想を攫ひこと肝要。

和文英譯としては佐久間氏のものも可ならん勿論敎科書を咀嚼することが第一義なり。新語は新聞其他にて記憶せられたし。

3　物理化學は敎科書を理解することに於て足る常識的問題も必ず一題は出る。平素目に見、耳に聞くもの、例へばブランコ、電線の連結法、寫眞の原理、獨樂等に就ての問題を自問自答することが重要。化學に於ても同樣、平凡なる問題と思ふも、種々あらゆる方面より自分が問題を造りて之に當る樣せられたし。

尙本校は實地技術を主とするエンヂニアーを養成するを以て目的となすに依り、入學後殆ど職工と同樣なる生活をしなければならない。木工、鑄物、鍛造、機械仕上、手仕上、板金細工等實習として課せられる。鐵粉、油等で顏や手は眞黒になつて仕舞ふが、自分自ら造つた品物を手にする時の歡喜は言葉では表はせない。兎に角本校に志望せられる諸君は、勞働を厭はぬ覺悟を持つて居て戴き度い。

四高より

同校　三浦一夫

華かな、而して淋しい北國の秋の夕暮は、餘りに短かすぎる。若い生氣に滿ちて居た敎室にもグランドも、夕霧は全く占領してしまつた。幾多の歷史に聳り立つ超然寮からは今宵も亦明るい燈火は漏れて來る。

あゝ逝く秋の詩も無く　神の啓示か朽葉散る
城の銀杏の榮淋びて　秋の淋しき眺めかな
欄干もたれ語へば　友の情の耳に泌みつ

秋の哀れを感じてか、それとも鄕愁に堪へかねてか、多感な若人の口からは止めど無く秋の寂歌は漏れて來ます。寮を包む夜霧は平和に益々濃です。惠の秋、お互に勉強に運動に一刻も徒費してはなりません。特に入學準備に對しては根底的準備を爲すに最も良い時季だと思ひます。

從來私共の經驗から申しますと、志願者の多少に關はらず、多くの高校入試に於ては、先づ七分通り確實に出來れば大抵の場合合格します。私の考では、或は偏見かも知れませんが、入試に於て及第點以上、即好成績を以てパスせんなどと野心を抱いて糞勉強に耽て、徒に成長發達の著しい大切な青春時代の健康を害する必要は絕對に無いと思ひます。要は最高點の研究よりも、最低點の研究にあります。七分通とは實力の養成を意味して居ます。實力を無視して受驗專問の勉強、點取主義の勉強は、時としては奇功を奏する事もありますが、得た智識は全く瞬間的で、永久的につかみ得たものは、或は一生の不健康位ものでしよう。これに反して、入試を目的にしてでも、一歩一歩と

規律的に根強く築き上げた實力は、我々に確實に合格の懌と、永久的の根本智識と、何等他力的束縛を受けない成長とを殘して呉れます。

遠き將來に生きねばならない我々は、目前の小難關に盲目にされ、大きい將來を忘れてはなりません。四高入試に對する策戰とでも云ふ樣なものを申し上げて見ますれば、先づ英語は成る可く要領をつかんで、簡單に書いた方が有利です。國漢はなる可く詳しく、作文は要語文句の美なる事より思想が大切です。數學は「考へ方」式に書かうと形式に苦勞しなくても充分ロジカリーに記述さへすれば結構です。其の他地理、歷史、物理等は敎室で敎つた事を了解さへすれば、其れ以上の事を勉强する必要はありません。

若し四高に入學しようとお考になる方があるなら次の事は御承知ないと、入學後は後悔なさるかも知れません。

四高に於ては、入學後は如何なる理由があらうとも、決して轉類轉校は許しません。だから入學前に帝大に於て學ばうとする科目の事を充分考へてこれに最も適する類を擇ばなければなりません、私立大學や專門學校、或は新設高校と異り、一般に舊設高校は、未だ大學豫科の傾向を脫し得ませんから、考へ方に依ては或は「つまらん」かもしれませんが、我々が帝大を目的とする以上は、大いに有利かも知れません。

出席の監督は非常に嚴重で、中學時代と何等其の點に於ては差別なく、又校の內規として、第二外國語は是非第一外國語と同樣に修めなければなりません。而して平常點と試驗點は半々の割です。私が中學時代想像して居た樣な、余りよくない意味の自由は敎室に於ては少しも見出す事は出來ません。平時に於て、可成の緊張は必要です。

この樣に書きますと、何だか四高には束縛と苦痛のみの樣に考へられますが、合理的に嚴重な規則の中には、眞に樂しい自由が見出されます。自然と敎授と生徒との間には、正しい了解と厚い同情が湧きます。樂しい運動會、華かなボートレース、愉快な寮の記念祭、憂身をやつす入高との夏の野球戰、六高との京都に於る火の出る樣な武術試合

腰にタオルをぶら下げて大道を濶步する時、親しい友など豚鍋をつつきながら華かなる可き將來を語り合ふ時は、泌々と高校生活の愉快さが意識せられ、根强く若い健全な懌はこみ上て來ます。若し四高入試に應ずる方があるなら、何卒學校宛に御葉書を御願いたします。現在同鄕の者が私と共に四人在學して居ますから、出來る事ならどんな御便宜でもはかります。我々は諸君の一人でも多く來らるる事を心から祈つて居ます。

熊本高工より

同校　長嶺幸三
　　西村正人
　　東一郎

（前略）學生諸君にして工業方面へ希望さるゝ方は、物理、化學の必要は勿論にして、特に三角、幾何、代數は何れも深く研究さるる事を希望致し候。用器畫も相當勉强さるる事を望み候又特に專門學校に入學されんとする方は、その校の歷史の新古を考へらるべく、先輩の有無は卒業後社會に立つ上に大なる關係を有し候。特に現在の如き狀態にある場合に於ては多大なる便不便を感じ申し候。本校の如きは工業學校中に比較的古き歷史を有し、先輩千數百を出し就中出身もその中にありて重要なる地位を占め盛に活躍いたし居り候。然るに本校現在の狀態はこゝ二年間一名の入學者すらなく、僅か小生等三名にて大に淋しさを感じ居り候。卒業せんとさるる諸君は必ず多數御遊學あらん事を乞ひ申し候。終りに臨み卒業生の異動を御報告致し筆を止め候　草々

原田勝次君　古河飯盛鑛業所（和歌山縣那賀郡）
光藤省一君　內務省門司港修築場（門司市葛葉）
山田雪三君　住友忠隈炭坑開坑係（福岡嘉穗郡）

神戶高等商船學校より

同校　福原行德

本校は阪神電車線に近く、白砂青松の間に在る。

前には茅の海を擁して、遠く泉、紀、淡の陸影を望み、後は六甲摩耶の連峰を負ひ、風光明媚、空氣の清澄なる所に特色を發揮し、神戸、大阪へ十數分乃至三十分餘にて達せられる便利を有して居る。校舍は堂々たる煉瓦造にして、今や學校の設備完成し、身心を鍛練するには絶好の位置である。本校の生徒が他の專門學校と比較して著しく優遇せらるる點を述べよう。第一、生徒は入校の日より海軍豫備生徒にて、卒業後直ちに海軍豫備少尉、豫備機關少尉に任ぜられ、年を經るに從ひて、豫備中佐迄昇進する事が出來る。勿論兵隊に出るのではない。第二、本校の卒業生は、學術試驗を受けずして、船長、機關長になれる特典が與へられてある。但し、最初は甲種二等運轉士、一等機關士免狀であるが、機關科では、卒業後僅か一ヶ年經てば、機關長の免狀が授與される、船——船と云へば、誰も至極危險だと云ふ感想が起るだらう。又世間の風評にも乘つて居るが、現今の汽船は決してそんなに恐ろしい物ではないと斷言する。然し海上生活は雄壯ではあるが、殺伐な事は事實である。されば僕は機關科を勸誘して止まない。なんとなれば繁華なる倫敦、雅美なる巴里、古史に富めるエヂプトのスフインクスや、ナイル河の流極樂蝶の舞ふ南洋等、世界至る所、心をきなく見物したる後、海上生活が嫌になれば、陸にて機關工場や、造船所、その他紡績會社等で務めればよい。丁度高工を卒業したのと、同資格である。學校の內容を少しく話せば、朝な夕な耳に響くエンヂンや、ハンマーの響は、如何ばかり我等の勇氣を鼓吹するか知れない。日曜毎には山なす荒波を乘り越えて、行くは明石か須磨の浦、嗚呼何たる痛快な事ぞ。

日本海の荒海を目前に控えて居る萩中健兒よ。指月山下の萩中健兒よ、强固なる意志と、豐富なる希望とを持して、此の商船學校に來られんを切に望む。

明治專門學校より

同校　宮國秀彥

母校を去つて早や半歲を經たる今日、諸君の爲に斷片的にも拙筆を動かすことを無上の名譽とせねばなりませぬ。暑熱は一向に去らうとはしませぬが、微に蟲の音を聞くだに秋を聯想します。と同時に諸君があのグラウンドに、運動會の準備に餘念ないこと、又五年生諸君には來るべき運命の開拓者たるべく、日夜勉强に寸暇も無いことゝ察します。今春、私が年來希望してゐた今の學校に、入學許可となつた時は實に嬉しかつた。然し改めて學校の模樣や、入學試驗の樣子といつて申し上げることはありませぬ。蓋し諸君が想像になることゝ露違はぬと思ひます。昨春本校が經濟上の問題から止むなく官立に變更されたことは、諸君のよく承知せられてゐることでせう。其他學校の敷地、設備、卒業生の現況等一々は申上げませぬ。本校の修業年限は四年で、一年は共通、二年以上より各專門に移ります。學科は鑛山、冶金、應用化學、機械、電氣の五ッに分れて居ます。每週火曜には講堂にて共通講義、土曜には專門學會なるものがあつて、それだけ見聞を擴めます。就中年に一回の通俗講演の行はるるなどは有益であります。學寮の生活も趣味の多い軍隊的生活を送つてゐます。各學期に軍事の試驗があり、十月には四日間の行軍があるさうです。軍器の取扱も相應に嚴重です。土曜の午後から日曜にかけて、散策に飯盒を携へることも樂みの最大のものでせう。夜會の餘興も珍しいものとなつてゐます。私なども過ぐる五月二十八日の開校記念日の夜は、俳優の一員として振舞ひ、今尙評判となつてゐます。最初私が此の地に來た時は聊か無聊を感じました。唯今母校卒業生としては機械科三年の鴛海君と二人です。私は諸君の中の多數が、私の微意たりとも汲んで此の明專に御入學なることを偏に希望するのです。つまらないことを言つて失禮しました。是で擱筆します。（九、一五、明專忘家寮第二班にて）

神戸高商より

同校　神田壽治

前後四星霜に渉る昇格問題の爲筒憂健兒が奮起して居る。商業大學か、將、又、三年制度の高等商業學校か、或は又廢校の運命に陷らんとする場合に、私どしては本校の內情、入學試驗に就きての注意等に關する事を述ぶる事は甚だ心苦しい。然し諸兄のために二三誌して、小生の微意の在るところを察して貰ひたい。本校のモットーとするところは「自由と眞摯」といふ五字にて、此の意氣にて商戰場に進まんとしてゐる。學風に就ては創立以來水島校長が鋭意努力せられし爲め、相當の歷史を殘す事を得ました。昇格の目的は或一方面より觀察すれば、近來高等學校、新制の私立大學に中學四年より入學し得るに就き、專門學校入學者の素質を低下する憂ある故とは、常に校長の說かれし所である。入學試驗に就きては他の學校と別に變つた事はない。以前は大變六ケ敷しい問題があつたが、昨年から本年にかけて非常に容易なつた事と思ふ。就中數學は學校の性質上不必要に感せられますが、重要視されて居る傾向がある。英語は現代文即ち新聞の記事体のものが多くある樣に思はれます。小生が試驗問題を學校へ送つたから、一讀なさつなら如何に容易になつたか、了解出來ませう。余り永くなりますから諸兄の健康と勉強とを祈つて擱筆します。

大阪高校より

同校　河村東一

私どもの學校は、大阪市外天王寺村字東天下茶屋にある鉄筋混凝土三層建の校舍がそれです。大正十一年度の開校にして、文科甲乙二類、理科甲乙丙三類より編成されてゐます。收容人員各類四拾名宛です。理科丙類は本校にあるのみで、その出身者も甲乙類出身者と同じく、大學の何れの部へも志望する事が出來ます。大阪といへば煙の都で騒々しく勉學には不適當の如く思はるるも、一度郊外に出づれば非常に靜かにして勉強には適し、且大書肆ありて書物を得るに便に、且利用すれば圖書館の便もあります。當地方は一般に運動は

盛んであります。本校も盛んになりつゝあります が、競技部に於て特にその兆候があります。扨て受驗者が入學歩合を見て自己の學校を撰擇するは不穩當ですが、參考迄に書きます。出願者文科六九九名、理科七七七名、受驗者文科約五五九、理科約五九六名です。

私の受驗に關する感想としては、余り打算的にやつて却つて失敗した事と、入場前に急速度に詰め込んで、頭を混乱させて、なか〳〵回復しなかつた事です。之が私の最も苦しい經驗でした。諸君も御同感か否かは諸君の御考へにまかせます。

尙山口縣下中學校出身者は、一名限りですから、ドシ〳〵御入校なさるやう希望致します。

（附記、大阪府下中學出身一三六名、他は兵庫京都、奈良、三重、秋田、長野、廣島、香川、山口縣で、兵庫縣の二二名を除けば他は一名乃至三名です）

京都醫科大學豫科より

同校　長井博通

天高く馬肥ゆるの日、燈火親しむべき夜は遂に來て、諸君には日夜運動に勉強に御精勵の事と思ひます。月日の流れは早く私も諸君同樣に指月の山麓に五ケ年の薰陶を受けたのも、今では華やかつた夢の如くで、唯だ無自覺に數年間を愉快に面白く過したことを思へば、一種の滿足の笑をもらさしむると共に、一方には懺悔の念の胸に迫まるを覺えます。扨て私は幸に四月より本大學豫科に籍を置くことになりました。本大學は昨年十一月に昇格し、大學部校舍は京都市內に在り、豫科校舍は洛西雙ケ丘にありまして、其の修業年限は大學部四年、豫科三年で、大學部は專門的の學問であるのは言ふまでもありませんが、豫科は大學部に入る必修の學問を授かる所であります。今豫科の方に就いて、少し述べて見ませう。其の修むる學科は高等學校理科乙と全く同樣で、唯だ動植物が生物學となつて、實習を主としてゐるのであり

ます。語學は英、獨、佛、羅甸、に國漢で、一年は佛語及び羅甸は未だ之を修めません。獨語は毎週十二時間宛にて、仲々苦しく思ひますが、少し勉強すれば、興味をおぼえます。ろして英語より寧ろ解し易い樣であります。英語も醫學を修むるには大變重要で、今後は益々其の傾向があるさうです數學は毎週四時間、一年では代數、三角、立体幾何で、二年からは高等數學にうつるのであります。物理、化學は無論重要視されてゐます。其の他論理、宗教、經濟等があります。体操は毎週三時間となつてゐます。尙は數學は英語で、化學物理は獨語で授けられてゐます。試驗は每學期末に行はれてゐます。運動も非常に盛んで、野球、庭球、端艇柔道、劍道等對校試合を行つてゐます。次に入學試驗ですが、今年度は英、漢、數、物理、化學で英語數學の重要視されてゐるのは言ふまでもありません。英語は殊に和文英譯を重じ英文和譯も比較的斷片的でない樣です。何處の學校でもさうですが殊に本校では單語の誤は輕く見られてゐます。其の他の學科に就ては特に申すまでもありません。

入試の競走率は非常に多いので、少なからず努力を要します。七年間の學生生活を送るには京都が最もよいです。

慶應大學より

同校　隅　元　保

都會でなくちや勉強は出來ぬ、田舍で出來るものではない、刺激が少ないから殊に萩なんかその甚しい所だから。と、かういふ幼稚な考を抱いて居た自分が、つく〳〵馬鹿らしく思はれます。何處でも變りはしない。私はさう思ひました、さうではないかも知れませんが。生徒は隨分澤山です、豫科一年だけで千名近く居ます。大半は經濟學部（前の理財科）の生徒です。他に醫科、法科、政治科があります。授業時數は一週二十五時間で、十時間を英語の方でとつて居ます。私等に新しい學科と云ふのは獨逸語と、心理で、別に經濟地理と云ふのがあります。英語の會話に骨が折れます。私等の受持の外人教師は日本語が話せるさうですが

教室ではどんな事があつても全く日本語は口にしません、「ヒヤー・サー」とか「プレゼント・サー」とか出席をしらべる時の返事の仕方さへ私は知りませんでした。初めての日は「ハイ」でもすみましたが、二度目からは「ハイ」なんか返事すると缺席にされます。忘れて居て「ハイ」と返事し、急いで「ヒヤー・サー」と云ひ直しても、それは勿論駄目です。私も初めの內は「ハイ・ヒヤー・サー」で「アブセント」に三四回されました。學校の中に佛語會、辯論部、劇研究會とか色々な會が三十五六あります。これらに入會すれば自分の好きなものが研究できるわけです。これらの會の主催又は後援で、名士の講演はしばしばあります。体育の方にも山岳部、競走部、端艇部等十五ばかりの會が出來て居ます。入學試驗の事なんか書きますまい。御承知の通りです。今一年では母校の出身は私一人ぎりです。ほんとに淋しい氣持がします。

神宮皇學館より

同館　田中清
　　中原義胤

肅啓　神風の伊勢の濱邊に颯々の風吹きて涼氣頓に加はり申候處諸先生生徒諸君には益々御淸昌の由恭賀至極に存じ候、卒業後御動靜御伺ひ致すべき筈の處兎角勝手を構へ意外の御無音仕り早くも一年有半を過し候、御宥免被下度候、御蔭樣にて無事勉學罷在候間乍他事御放念被下度候

扨て過日は御芳墨を忝くし數ならぬ身の光榮此の上なく難有存じ候、御懇さに甘へ聊か當館の狀況御通知申上候、本館は明治十五年四月神宮祭主久邇宮朝彥王殿下の令旨により神宮神官をして皇學を研究せしめんが爲め設置せられたるを以て創始と致し候、爾來幾多の變遷有之候へども『皇國の道義を講じ、皇國の文學を修め之が實際に運用せしめ云々』の令旨のまに〳〵今日に至り候、而して本科專科に分れ本科は卒業後中等學校教員官國幣社神職に專科は神職になるべき資格を得候。

（主として本科のこと申上候）學科目は歷史、國

漢文、修身、哲學、英語、禮式、法制に候、特に歷史は他に比類なく深く研究致し國漢文之に次き候、苟くも世の榮枯盛衰を知らんと致され候人は宜しく歷史を繙かるるの必要有之候、皇國の歷史を學ばる人の一度は校門を訪れられたく候、試驗は歷史に於て多く失敗致し候、試驗に於て常識の有無も調べられ歷史の如きは爲めに全く「山」はかかり申さず候。一般に熟讀玩味すること肝心に候、「淺くとも博くあるべき必要有之候」入學試驗に關しては以上の注意肝要に候。次に本館は、特待生、館費生、文部省奬勵生等有之特に有爲の士は外國留學生となるを得候。學生は一般寄宿舍に入寮致し精華寮の名のもとに國体の精華を學び之れを遵法、啓發、博愛、義勇の四寮に分ち候、斯くて皇道を深く學び朝は一同遙拜殿に會し震棚く神路山に鎭座ます皇祖太神を拜し奉りて身自から皇國の字内に尊き所以を知り申候、志士の來りて修學すべき理想地に候、特に今日に於ては、諸君の御來光を待ち申候、先は拙文ながら一筆御通知仕候、終に臨み諸先生諸彦の御安康を祈り上候　匆匆頓首

黎明の同志社校庭

同大學　恒石八郎

朝霧深き黎明の吾同志社校庭、
神秘な嚴肅な尖塔は狹霧の中に立ち、
露にぬれた草木はまだ眠りから醒めない。
朝明けの空はまだ明け切らないが、
紫色の曇の一角がかすかに紅潮したのは、
やがて新らしい朝を祝福する太陽の出現。

凡ての醜惡や虛僞や不安は影をひそめて、
只限りない平和と愉悅と嚴肅とが私を浸す。
惠まれない人人よ、汚れた者よ醜い心の所有者よ、
お前たちは皆ここへ集つて來るがいい。
朝の雫と大陽のひかりとはお前たちを聖くする。
おゝ東の空はもう明け切つた。

偉大な太陽の光よ、そして曙の雲の色よ。
狹霧を破つて流れる光に自然は輝き、
草木は生の歡びに醒め微風は私の胸に吹き入る。
おゝ狹霧は晴れて太陽は高い。

祝福された豊かな私の魂のささやきがきこえる。
今こそ私は救されたのだ、今こそ私は自由だ。
私の上に擴つたこの深い新清な秋の空はどうだ、
私は胸をたたいて歌ひそして躍る。
感謝と愛に惠まれた私の魂の豊かさよ。
おゝ黎明の太陽に輝くこの同志社校庭。

（完）

私の心は祝福され、胸は廣くそして熱い。
凡ての正しい善きものの集るこの同志社校庭。
おゝ今鳴るは朝の教會の鐘。

かすかに聞える朝の祈りと讃美歌の聲、
私の諸手はいつしか組まれ瞳は涙に熱くなる。
多くの僞善者よ、そして貧しさを知らない人人よ。
お前たちの眼が熱くなり心が濡れた時こそ、
お前たちは聖められそして救される。

◎統計のいろ〳〵

○大正十年度半途退學者。大正十年度に於ける半途退學者の原因を調査するに、家事の都合といふが最も多く、學年別では三年生が最も多く、一年生が最も少い。

○大正十年度事故、大正十年度に於ける病氣缺席者中、十日以上も長く引續いて缺席した者は、多くは脚氣である。

彙報

○第四學年生徒　修學旅行記

○萩より吳へ

吳、廣島、宮島、長門峽方面を見學すべく、吾等四年生の修學旅行は、五月一日より向ふ五日間の豫定を以て擧行せられたり。一行は八十四名の生徒と河野、古川、田總、相島の四先生なり。

△五月一日　萩出發

豫定の通り午前二時までに金谷天神境内に集合す。一人の遲刻せし者もなし。道中の安全を天滿宮に祈りつゝ、直ちに山口町へ勿つて出發す。一点の星すらもなき闇黑の世界を、只只前途に對する希望の光明と、圖に投ぐる提灯の光ともて照しつつ、蜿蜒たる寂寞の道を山口町へと急ぐ若人等一行の、その夜の感想はそも如何なりけん。明木を過ぎ一舛谷の隘にかかる。この坂路には初め大言壯語せる輩も聊か閉口せるらしく、軍歌の聲もせず、自然に合する足音と、時々發する嘆聲のみ寂寞を破れり。五時頃漸くにして平坦なる道路に出で、櫻の茶屋にて朝飯を喫す。見よ、一枚一枚ヴエールを脫する如く吾人の眼前に現れたるは、重疊たる連山、蒼茫たる大森林、蓋し夜の幕は捲き揚げられたるなり。あゝ偉大なる曉の山中よ。再び元氣を恢後し、七時二十分一の坂麓に着山口町を見下しながら一の坂を下る頃は、大陽斜に照りつけ、流汗淋漓として盛夏の如し。同九時半上堅小路香川旅館に着す。旅裝を整へ、十一時までに停車場に集るべしとの命あり。それまで各自自由に町内を見物す。特筆すべき事なし。

△山口發吳市へ

十一時五十分汽車中の人となる。小郡にて上り列車に乘り換へ、大道の松原を過ぎ、德山に至る。ここにては煉炭所の煙突濛々たる煙を吐く。將來益々發達の餘裕あるは五分間の停車中にも認むるを得べし。午後六時廣島驛着。途中左には兀兀たる禿山、右には渺茫たる瀨戶內海を望む。車上よりの景色甚だ美し。これより吳行に乘り換ふ。大小の隧道忽ち迎へて忽ち去る。天王驛より暮色四邊を罩め、吳市間近に來る頃は、電燈點じて甚だ美し。同七時二十分吳驛に下車す。高須三雄氏の代理及び本年卒業の鹽崎長久君の案內にて野村旅館に向ふ。高須氏は萩町土原の出身、萩學校時代の卒業生なり。河野先生と親交あるを以て、特に出迎へられしなり。目下海軍用達として吳市實業界の大立物なり。野村旅館にて一行初めて旅裝を解き、夕飯を終り、十一時まで勝手に散步を許さる。共進會の大歡迎門彼方に巍然として聳ゆその盛大を思はしむ。高須氏より繪葉書三組宛寄贈せらる。感謝すべし。十一時就床す。吳の物價安きこと夥し。

△五月二日　工廠及び共進會見學

午前八時半より隊伍整然として海兵團に至る。市內の淸潔にして區宇正しき、水兵職工等の雜閙、流石はと思はしむ。時に海兵團

內には水兵の退團式あり。我等はその式に列したる後、案內者に依り內部を參觀す。終りて海軍工廠に赴く。千百の煙突半空に聳ゆ、鐵槌の響囂たる中を二組に分れ、說明者に從ひて進む。廠內は造船部、造兵部、製鋼部等數部に分る。船渠內には艦艦たるべき豫定の搖津ありき。港務部に特別に交涉して汽艇を借り受け、十二時過ぎ河原石なる共進會第二會場に向ふ。ここにて晝飯を喫し、海軍參考館に入る。館內の出品物は主に工廠海兵團等より出品せるもの、大砲兵器その他の軍需品、衞生參考品諸種の機械等陳列せらる。大砲その他機械の實地運轉、アセチリン瓦斯にて、厚さ五寸許りの鐵板を打ち切る如き、實に驚歎にあまりあり。只遺憾なりしは、見學の時間の少かりしことなり。午後一時半共進會第二會場へ向ふ。第一會場は二河公園內にあり。同五時までに吳驛前に集合せよとの命ありて、一同解散し、自由に場內を觀覽す。價格高きものは二千円の佛壇、千五百円の神輿、千三百円の白金時計位に留らん。概してこの共進會は海軍參考館の外、あまりに目を惹くものあらざりき。名殘り多き吳を同六時二十分列車に乘り廣島に向ふ。

（田原節夫、齋藤彰、記）

○吳——廣島——宮島

△吳發廣島に入る

一日中步き續けて疲勞したる體を廣島行の列車に投ぜしは、午後六時十分なりき。吳廣島間の隧道の多き、送りては迎へ、迎へては又送る。夕日は正に西海に沈まむとし、暮靄あたりを包み、い

も云はれぬ內海の靜けさ、その美しき光景は、繪にもかかまほしかりき。沿岸には牡蠣の養殖殊に盛にして、時折葡萄もうゑたり。かく內海の景に憧れつつ、遂に七時を過ぎ四十分廣島驛着。直に驛前の○一旅館其他二軒に分宿せり。夕食後自由散步を許され、各々思ひ思ひの方面に向へり。

△五月三日　廣島市中見學

明くれば五月三日、天朗かに晴れたり。宿を出で道を東練兵場にとり、東照宮を眞正面に見て、それより饒津神社に參す。次に淺野家泉邸へと向ふ。その人工の美を盡せる、蓋し嘆賞に堪へざるなり。庭內に鵜を飼ひ、池には舟を浮べたり、稱して縮景園といふ。觀古館は都合により見るを得ざりしは實に惜しむべし。泉邸を後にして大本營跡へと向ふ。大本營は和洋折衷の建物なり。一將校に案內せられ玉座を拜しぬ。その貴素なる吾等の恐懼して措かざる所なり。日淸戰役中、先帝陛下には　畏くも供御を損じ飮膳を減じ給ひきといふことなど、案內者は詳しく語り聞かせぬ玉座を拜し終りて　陛下の御浴室、待從室など拜觀し、戰利品陳列室に到る。破れたる軍旗、鉄砲、劍等珍らしきものありて、余等の目を引けり。それより天主閣に上る。廣島市の全景一眸の中に入る。頂上の室は廣さ六疊位なり。天主閣を下り晝食せしは十二時前なりき。午后は自由散步を許され、遠きは宇品に、近きは市中各方面へと勝手に散步す。かくして十分の見學をなし、五時三分の列車に投じ、宮島へ向ふ。

（大山岩雄記）

○宮島——山口

△嚴島着

五時三分下の關行の汽車に投じ、宮島に向ふ。再び沿道の風光を賞しつゝ行く程に、五十三分宮島驛に着きたり。海岸の石上に腰を下し、暫く連絡船の來るを待つ。時に夕陽清波を照し、海面は金色に輝き、彼方を望めば、一衣帶水を隔てゝ彌山の屹立せる麓宮島の市街を眺め、大鳥居の海岸に立てるを見る。六時三十分、連絡船瀨戸丸に乘りて嚴島に向ふ。船は波靜かなる海面を走り行く十三分、我等は此島に第一歩の足跡を印しぬ。先づ目にするは店舗に美しく飾れる種々なる竹木の宮島細工なり。それより直ちに宿所と定められたる旅館亀福支店に至れば、流石に天下の名勝地なり、吳廣島の旅宿に比し、室内廣く、一行八十餘名を宿すに毫も狹隘を感ぜず。夕食後十時半迄自由散歩を許さる。電燈の光にて白晝の如き店の間を過ぎ、彼の有名なる高さ四丈四尺餘すありと言ふ大鳥居等を見歸宿す。

△五月四日　彌山登り

七時五十分、宿を出で彌山に登山す。空を仰げば斷雲散在せる絶好の登山日和なり。一行の元氣旺盛にして、一の鳥居を過ぎ、名にも負ふ白糸の垂るが如き白糸の瀧の涼々として下れるをよそに見、次第に登りて十數町目に至れば、聊か足の疲るゝを覺ゆ。暑さは刻々に加はり、終には上衣を脫し、溪流を掬して渇を醫しつゝ、喘ぎ〳〵登る。仁王門を過れば須臾にして彌山頂上に達せり。踏破せし道程二十四町。これに要せし時間約一時間半なり。眼を恣にして眺むれば、近くは江田島、廣島、宇品より、遠くは讃山、讃峰まで、一時の中に映じ、眺望絶佳なり。一小堂あり。名刺の所きらはず貼られたるも亦多し。登山記念の爲ならむ、我等も眞似て署名して貼る。傍の茶店にて、登山記念スタンプを絵葉書等に捺し、晝食を爲し、暫く休息せし後、道を轉じ、大元公園に向ひ下山の途に就く。來間持堂にて瞥窓海の點むたりと言ふ不消の靈火を見、岩屋大師を過ぎ、龍が洞に至り、漏内を覗けば、其深さ測るべからず、自ら慄然たらしむ。十時四十五分大元公園に着きたり。

これより午後一時まで自由散歩を許さる。公園を出づれば寫眞館軒を列べ客を呼ぶ聲かまびすし。紅葉谷に至れば數十の楓溪に望み「停車坐愛楓林晩」と杜牧の詠ぜし秋の暮も思はる。千疊閣に至り、太閤の榮華の昔を忍び、嚴島神社に詣づ。廻廊の長さ百餘間、屈曲も、廻折して、長く海上に突出し、神鹿は其間を遊遊し、人々に戯る。廻廊續きに寶物殿あり、爰にて名寶を縱覽し、午後二時十分連絡船下の闕丸に乘りて宮島驛に歸り、三十七分下關行の列車中の人となる。

△宮島發山口へ

車窓より隱顯する瀨戸内海の風景を賞しつゝ行く程に、德山のあたりより暮色次第に濃く、終には汽車は闇の中を縫々と音を響せつゝひた走りに走り、八時二十九分小郡に着けり。直ちに山口行の汽車に乘り換へ、九時二十五分山口に着しぬ。我校出身先輩諸氏に迎へられ香川旅館に着けり。直ちに夕食を喫したる後、親切なる諸先輩諸氏の主催にて、我等の歡迎茶話會を催さる。愉快なる談話の内に時は次第に移り、十一時半一同寢につけり。

（青木弘記）

○山口—長門峽—萩

△五月五日　長門峽遊賞

午前七時二十分山口驛を出發し、車上の人となりぬ。軌道は追々と昇り、汽車の速度遲し、同八時二十五分長門峽假驛着。隊伍を整へ丁字川より長門峽に入る。清流潺湲として我一行を迎ふるが如し。この日快晴にして暑さ益々加ふるものの如し。川に沿ひ下り行くに從ひ、山深く水益茂く、道は愈狹くなり、時には巨岩の下を通る。魄散じ魂飛ぶが如し。水流滔々、或は懸つて小瀧となり、或は淵へては淵となり、斷岩絶壁その側に削立する樣、實に雄大に、洵に壯嚴なり。このあたり楓樹繁く、清水と映帶する景愛すべし。約一里許も入りたりけん、猿澤瀑布あり。一行此處にて晝を眺めつつ晝飯を食し、後河づたひに下る。川上村に着し各々隊伍を整へて六本松に着す。此處より校歌を誦する聲も勇しく七時前、金谷に着し、萬歳聲裡に解散せり。

あゝこの行や天氣晴朗に、一行の元氣益々旺盛に、規律を守り、豫定の如く歸校するを得しを喜ぶと共に、諸先生の容易ならざる配慮を感謝するなり。

（來島勝男記）

◎兩學生の表彰

昨年十月八日、本郡川上村字相原部落出火の際、本校生徒益田致義、伊東武夫の二人が逸早く村役場に驅付け、重要書類を搬出して其の類燒を免れしめし爲め、森川上村長より本人に感謝狀を贈りし事は已に前號に報せり。其の後縣當局に於ても兩生徒の行動を壯なりとして、左記の通りの賞金及賞狀を贈られぬ。本校にては十二月廿四日、第二學期終業式の際之が傳達式をなせり。

賞狀

山口縣阿武郡川上村
萩中學校一年生　伊東武夫

大正十年十月八日、山口縣阿武郡川上村内ニ於ケル火災ニ際シ、自己ノ危險ヲ顧ミス、挺身猛火ヲ侵シテ、同村役場内金品ノ撤出ニ努メタルハ、洵ニ殊勝ナリトス。依テ金參円ヲ賞與ス

大正十年十一月二十一日

山口縣知事從四位勳三等　中川望

賞狀

山口縣阿武郡須佐村
萩中學校四年生　益田致義

大正十年十月八日、山口縣阿武郡川上村内ニ於テル火災ニ際

シ、自己ノ危險ヲ顧ミス、挺身猛火ヲ侵シテ、同村役場内ノ重要物ヲ搬出シ、一面消防ニ盡瘁シテ、延燒ヲ防止シタルハ洵ニ殊勝ナリトス。依テ金五円賞與ス。

噫、矢田部嘉友君

犧牲的精神の權化、學生の模範として、我等は此に一義勇青年を世に紹介し得るは、我等の一の誇とすると共に、又思出の涙を禁ずるを得ず。君が生前の略歴、犧牲的勇敢の行爲を記して、一には我等が龜鑑とし、一には君が英魂を吊はんとす。

生ひ立ち

君は明治三十七年九月廿九日を以て布哇のカワイ島コロア耕地に生る。父助七氏は幼より布哇にありて小學教育を彼の地に受け、二十三歳にして一旦歸朝せられしが、結婚後再び彼の地に渡航し、甘蔗栽培會社の重要なる位置に就かれしなり。君は其の後間もなく母に伴はれて萩に歸らる。家庭には兩親の外弟四人あり。一人は大島郡の親戚に養子となり居り、家庭内には十歳、六歳、二歳になる三人あり。

明治四十四年四月明倫尋常高等小學校第一學年に入學す。幼より非常に軍人を好み「軍人になりたい」と常に口にせりといふ。高等一學年及二學年の時二回陸軍地方幼年學校入學試驗を受けしも、体格不良の故を以て採用せられず、大正八年三月高等科を修了し、同年四月山口縣下中學校共通入學試驗に合格す。

中學校入學

大正八年四月十二日萩中學校第一學年に入學す。入學後勤勉にして、缺席、遲刻、早退等極めて少し。体格は強健の方にして、成績は入學以來學年の進むに從ひて漸次良好となれり。全學科中漢文

博物、物理、圖畫は本人の最も得意とする所なりき。武道に對しては柔道を好み、一年後より三年校に至る迄、寒稽古に出席し、殆んど皆勤せり。且水泳は其技非常に上達せり。趣味としては讀書を好み、平素教科書勉強の間には種々の書籍雜誌を讀むを以て樂とせり。性質は温順にして勇氣に富み、友人に親切にして、未だ嘗て人と爭ひたることなし。擧動は靜肅、沈着にして、柔道、体操等の場合には活潑なりき。

噫其犧牲的精神

大正十一年六月廿四日(土曜日)午後三時過、志都岐山神社境内綠蔭風涼しき所にて、讀書に耽りつゝありし君は(君は自宅書齋にて勉強に飽けば、志都山神社境内に散歩旁々勉強に行くを常とせり)歸宅せんとして、御濠眼鏡橋に差かゝりし際遥か濠の東端に當りて、一少女が狂犬に襲はれ、悲鳴を揚げて頻に救助を求めつゝあるを發見せしを以て、直に現場に疾驅し、荒れ狂ふ狂犬を擊退し、漸くにして少女を、狂犬の毒牙より救ふを得たり。然れども不幸にして其際君は、該狂犬に左の手首を噛まれたり。沈着にして勇氣に富める君は、少しも屈することなく、該少女を其の家に伴ひ歸れり。

各の少女は堀内在住の、明倫小學校訓導吉屋國吉氏の長女ヨシ子(一〇)なりき。かくて君は少女を宅に送り届けし後己が家に歸り、事情を家人に告げたる後、自ら玉木病院に至り、狂犬病豫防注射を受けんとせしも、生憎當時同病院には該注射液なかりしを以て、單に應急手當を受けて歸宅し、一方其の旨を萩警察署に届出でたり。

犧牲となりて斃る

當時萩警察署には狂犬病豫防注射液の持合なかりしを以て、早速該液取寄方を警察署に依頼し置き君は手に繃帶を施しながら廿六日(月曜)は學校に出席し、平常の如く授業を受く。然るに一日も早く到着せんことを祈りつつありたる注射液は、容易に來らざりしを以て、君が父は直接福岡大學に打電して之を取寄せ、七月五日に至り始めて當警察醫の手によりて第一回注射を受けたり。實に狂犬に咬傷せられてより十一日目なり。注射液の早

く來らざりしをば、君が爲め實に遺憾至極といふべし。爾來日々注射を受けつゝも、勤勉なる君は一日も缺席することなく、第一學期の試驗も終へ、七月二十四日の第一學期終業式當日まで、平常の如く出席せり。

然るに七月廿七日午後七時頃に至り、狂犬に噛まれし左の手は痛み出し、何となく氣分惡しとて當日は早く寢に就きたり。翌二十八日に至るも其痛尙は止まず、已むなく同日午後四時山本校醫の診察を受けて服藥す。廿九日午前は徒歩にて校醫宅に受診に赴く。三十日午後十一時頃より左右兩手とも痛み出し、夜半少し過ぐる頃よりは唾液の出づること甚しく、本人も何となく苦痛を感ずる樣に見ゆ。病勢刻々險惡に向ひぬ。翌三十一日午前七時二十分に至りては、全く絶望狀態に陷る。

これより前、彼の少女吉屋ヨシ子は、狂犬に左右前膊部、背部及頭部を咬傷せられしが、二十七日夜十二時頃より狂水病を發し、遂に二十九日に至り絶命せり。此の報を聞きし君の胸中そも如何なりけん。已もやがて同じ運命に陷りざるべからず。

十有九年の奮鬪努力の修學も此に終を告げ、樂しき未來の理想も雲散霧消すべきか、嚱。三十一日午前七時三十分、死に瀕する迄意識明瞭なりし君は「御母さん、先生にもよろしく、皆々樣にもよろしく」と、最後の言を殘して、幽冥不歸の客となりぬ。生れて十有九年、若木の櫻も花咲くことなくして、無情の嵐に散りぬ。

悲報學校に達す

君が逝去の報學校に達するや、學校には職員を召集し、緊急會議は開かれぬ。當時夏季休業中にて歸鄉、又は出張せる職員を除き、萩町在住中の職員及生徒の會葬の件、校友會より金參拾圓を香奠として靈前に捧ぐる件を議決し、それ〴〵適當の處置をとりぬ。

八月二日午後五時、熊谷町俊光寺に於て葬儀は營まれぬ。吉屋訓導は吊辭を讀まれぬ。淚の爲めに讀み得ざりしはさもありなん。岩田學校長は本校職員を代表して、靈前に告別の辭を述べらる。滿堂聞として歔欷の聲さへ聞かぬ一四年生青木弘は生徒總代として弔詞を讀む。

弔辭

大正十一年七月三十一日、山口縣萩中學校第四學年生徒矢田部嘉友君逝カル。嗚呼悲シイカナ。君資性溫厚、頭腦明晰ニシテ、殊ニ犧牲的精神ニ富メリ。君ノ病ヲ得ラレシハ本年六月二十四日ナリ此ノ日君志都岐神社附近ニ逍遙中、偶一少女ノ狂犬ニ咬傷セラレツヽアルヲ目擊スルヤ、奮然トシテ危險ヲ冒シテ其ノ急ニ趨キ、潮ク狂犬ヲ驅逐スル事ヲ得シガ、不幸ニシテ君亦之ガ爲ニ左手ヲ傷ケラレヌ。爾來專ラ加療怠リナカリシニ、天君ニ年ヲ假サズ、藥石其ノ効ナク、享年十九才ヲ一期トシテ、前途有爲ノ才ヲ抱キ遂ニ遺憾トシテ玉碎セラレタリ。悼惜何ゾ堪ヘン。然リト雖モ君ガ此ノ勇敢ナル行爲ハ、能ク平素義勇ノ校訓ヲ服膺シ、犧牲的精神ヲ完ウセラレタルモノニシテ、誠ニ感歎措ク能ハザル所、實ニ衆人ノ模範トスルニ足レリ。孔子曰ク「身ヲ殺シテ仁ヲ成ス」ト君ノ謂カ。今ヤ世上酒々トシテ輕薄ニ流レ、人々唯自利ヲノミコレ計リテ、敢テ他ヲ顧ミズ。犧牲的精神日ニ地ヲ拂ハントスル時ニ當リ、君ノコノ行爲ヲ見ル、其ノ世道人心ニ及ボス感化決シテ尠少ナラザルヲ知ル。君ノ死ヤ、是ニ於テカ大イニ意義アリ。君ノ如キハ、死シテ猶生クルモノト謂フベキカ。思フテ此ニ至レバ君ガ音容髣髴トシテ、猶耳目ニ在ルヲオボエレド、幽明既ニ處ヲ異ニシ、幽魂呼ベドモ答ヘザルヲ如何セン。嗚呼悲シイカナ。此ニ謹シミテ吊辭ヲ述ブ。

大正十一年八月二日

山口縣立萩中學校生徒總代　青木弘

校訓の一節

本年二月頃より縣下各地に狂犬頻はれ、被害の報頻々たりしを以て、縣當局にては係員を各地に派し、狂水病豫防竝に注射の宣傳を行へり。我が校に於ても四月十日、沖原萩警察署長及山口縣衛生技手秋重常太郎氏來られ、放課後講堂に於て、職員生徒一同に對し、秋重技手より狂犬病の恐るべきこと、一旦嚙まれたる上は豫防注射の絶對必要なること、應急手當方法等につきて講話あり。且警察署より送られたる宣傳ビラをも學校に揭示したるを以て、君は狂水病の如何に恐るべきものなるかに就て、充分知悉し居たり。然れども一少女の危急を目擊しては、一身の危難を顧慮するに遑なく、奮然身を挺して之を救はんとせしなり。

「義因勇行、勇因義長」之士規七則の一則にして、我が校の平素校訓として、生徒に訓示するところ、今や我等は校訓の一則を實地に體驗せる一義勇青年を見たり。我等は君の死を悲しむと共に、又一には我等の誇とすべきか、我が學校長は早速事情を具して、縣當局に其の表彰を申請せり。

死して餘榮あり

君が義勇の行動は、縣當局を動す所あり。十月七日附を以て、橋本本縣知事は、表彰狀に添へて金貳拾圓を贈らる。之が傳達式は八日、第五回本郡西部十一ヶ町村聯合武道大會の好機を以て、明倫小學校に於て行はれぬ。恰もよし展墓歸省中の田中大將も臨席せられぬ。岩田學校長は事情を詳細に說明せらる。表彰文は君が嚴父助七氏に傳達せられぬ。

表彰文

山口縣阿武郡萩町故矢田部嘉友父
矢田部助七

故矢田部嘉友は生存中大正十一年六月二十四日、居町吉屋愛子が同町志都岐神社境內に於て、狂犬に襲はれ、最も危急の狀態にあるを認め、自己の危險を顧みず、之が救助に向ひ、死力を竭して狂犬の驅逐に努めたるも、自己も亦之が毒牙に罹り、遂に空しく殞るゝに至る。此勇往敢爲の氣慨は以て懦夫をして起たしめ、其犧牲的精神は一般民衆の龜鑑にして洵に殊勝なりとす。依て金貳拾円賞與す。

大正十一年十月七日
山口縣知事從四位勳三等　橋本正治

其の後矢田部助七氏は、君が此の名譽を得たるは全く平素我が學校の教育の然らしむる所とし、校友會基金の中に、金貳拾圓を寄附せられぬ。あゝ死して餘榮あり、芳名指月の櫻花と芳ばしく、長く學生の龜鑑となるべし。

逸事

君は幼時より兩親に對しては一度も口答をなしたることなく、食事の際食物の小言を云ひしことなし。平素學校より歸れば、喜んで家事の手傳をなし、未だ嘗て之を厭ふことなく、弟を愛し、父母に優しかりしといふ。最に幼年學校入學の目的なりしに、不幸体格に於て不合格となりて其の目的を達する能はず、依て中學校卒業後は、高等學校に入學せんとし、一意其の準備に餘念なかりしに洵に惜しむべきなり。

反響

大正十一年十月發行の「山口縣教育」紙上に於て縣視學熊野隆治氏は「犧牲的學生矢田部嘉友の君善行を歎賞して教育の眞諦に及ぶ」と題して、一文を掲載せられたり。今其の數節を引用すべし。

教育は教育者自身の期待を裏切つて、被教育者の一片耿々の靈火に點火するの力となつて現はれずに、僅に彼等をして、物質文明の尊さに憧憬せしめ、之が順應の途を照すの用を現はすに過ぎない。殊に中等教育に至つて、著しく其の實蹟を見るの淋しさを感ずる。私は此時に當つて讃嘆すべき善行の我縣中等學生に現はれた事は、眞に嬉しい極みである。即ち矢田部嘉友君の事實である。

人の眞價は死に當面した時程露骨に知り得らるるものはない。人間の徹底的の實價値は、此時最よく知らるゝものである。彼矢田部君は實に平凡生であつた。普通生であつた。而して其實價は常に倫理を口にし、宗教を叫ぶ老書生の遠く及ばぬ處では無いか。

矢田部君の此偉大な決心が、何處から生れたか、家庭教育の力か、學校教育の力か、天資か、將た境遇か、色々と事實に就て探究して見たが善く分らぬ。併し私は之と斯樣に臆斷した。一は彼の資質から來て居るに相違ないが、一は無意識的教訓の働だと思ふ。彼が決然として危害を豫想しつゝも、強き良心の命令に動いた所以は潜在意識に横はつて居る強き暗示の力が、利害の打算を無意の間に壓倒したものだと思ふ。私は常に斯く信じて居る。教育の眞諦は人間の無意識界の培養だと。

其の無意識界の培養は、何に依てせられたものが其主なるものであつたか。私はやはり萩地に於ける少時小學校時代からの、幾多境遇の善教訓の滲潤だと言ひたい。殊に最近には、中學校に於ける校風、校長以下職員各位の無意識的の影響だと思ふ。同校校訓の質素義勇、即ち「義は勇に因て行はれ、勇は義に依て長す」の松陰先生の語は、彼矢田部君三年余の中學生活に、それともなしに幾多の機會に依て、深き刻銘を與へて居る。

宮城縣下の一女教員が、公務の爲めに溺死した美談は、天下の人心を動かした、併し私は冷靜に道德の批判を彼矢田部君の上に移したら、その何れがより美しきか疑なきを得ぬ。（以上節略）

寄宿舍生活に就て

三年　野村久一記

今や社會の風潮は、漸次個人的から團体的となつて、共同生活に適合しない者や、社會共存の道義を遵守し得ない者は、適者生存の原理で、社會の競爭場裡から驅逐せられる樣になつた。此の意味に於て、將來の社會に適者たるべく、それが修養の爲に設けられたる寄宿舍なるものは、大なる意味を持たねばならぬ。

卅六萬石の城下、質實剛健を以て歌はれた萩中學校の後に、二階建の建物がある。此れが我々の起居する誠之學舍だ。新舍と舊舍とに別れて、全体で十三室ある。舍監室は凡そ中央にあつて、舍生勉學の便宜上英、漢、數、体操受持の四人の舍監が交代で宿直する事になつて居る。我等舍生は現在九十七名居る。甚だ少いが何分目下の建物では之以上の收容は出來ない。そこで醇良で、外部の惡風に感染し易い一年生を主として收容し、四年を終ると多くは退舍する事になつて居る。

昔は鐵カラと制裁を以つて隨分知られたものだ、然し今もま尼昔の樣に思つて居る者があるとすれば、それは餘りに時代を無視して居る者と云はなければならない。此の四五年に社會が如何に進歩し變化したかを知る者は、此れを容易に解する事が出來るであらう。寄宿舍は道場である。共同宿泊所では無くて家庭であると云ふ主義のもとに、すべてを次第に家庭化し、嚴正なる規律の中にも、慈愛と温情とを以つて、互に切磋琢磨して居る。各室には上級生が一人宛室長となつて、舍監を助け、自治的に統御して居る。然し大体に於て自治的であると云つても、決して上級生が下級生をいぢめると云ふ樣な事はない。下級生は上級生を尊敬し、上級生は下級生の人格を認めて、敬愛して居る。毎朝或は校外で舍生は決して敬禮答禮を失する樣な事が無いのを見ても分る。勿論長幼の序は一絲亂さず守られてあるが。一室に一年生から四年生まで雜居して居る爲か、兄弟よりもなほ深い友情を見せて居る。第一學期だけは新入生のみを新舍に收容するが、二學期からは一年生から四

年生まで皆雜居して、各々小さなホームを造る。一年に春秋二回、新入生歡迎及四年生送別の意味で茶話會が開かれる。壇上には小學時代に敎はつた唱歌や聞きかじりの琵琶歌や、或は手品劍舞など子供相應の隱藝が出るかと思へば、蓄音機が出たり、本物の琵琶師が飛び出したり、はては合唱となつたりして、此處に舍の極樂境が現出される。此の茶話會は舍生の一生忘れる事の出來ない樂しい思出の一つであらう。此の外舍全體の催としては庭球野球の大會などよく行はれるが、今後は舍生の希望と舍監の盡力と相待つて、春は旅行に、夏は海に、冬は兎狩などの男性的で、かつ一家團欒的の催を大いに行はうと思つて居る。

此れから舍生の日課を大略掲げて見よう。此頃は朝六時に起床、十五分間に蚊帳をたゝみ、寢床を上げ、顏を洗つて、服を着かへねばならぬのだから、仲々忙しい。十分体操がすむとすぐ掃除に取かゝる。此處ばかりは金の門閥の光が一向物を言はない、どんな富豪の坊ちやんも名門の一人息子も、寒中手を眞赤にして雜巾掛をしなければならぬ。卅分に食事をすますと、出校用意の鈴が鳴るまでは、其日の豫習に頭を惱ます。今頃は午後三時半から入浴が出來る、普通は日、水、土の三度だが、夏は每日入浴する。五時に夕食を終ると、六時の門限までは、此頃盛にあつた競技運動や、テニス、キヤツチボールなどに餘念無い。門限は平日は六時だが、土曜日は七時だ。夜間は決して外出する事は許されない。默習は二默習に分たれて九時十五分に終る。默習中は字の如く絕對に默讀しなければならないが、一寸質問するぐらゐは差支へはない。九時十五分から卅分ばかり、八十六疊敷の談話室で十文字氏の自彊術を始める。之が終ると消燈して就床する。試驗前には消燈しないで徹夜で勉強する熱心家もある。

每週水、土の二日には、花月堂が來て菓子店を開く。火曜日には文房具屋が來て店を開く。菓子以外は全部手形で買ふのだから、本が菓子になつたり、靴下がラムネにばけたりする氣づかいは無い。時々舍監と室長が協力して、共同購入をやる。新學期のノートブックを始めとして、石鹼、手拭、靴

下なぞの日用品も購入した、何分百人分も一緒に買ふのだから非常に安くつく。

學資は一ヶ月廿圓あれば十分であらう。食費が約十圓、授業料が三圓廿五錢、舍費其他修學旅行積立金などで一圓十五錢、それで學用品や、日用品、小遣などが、五圓六十錢もある。此の樣に安くつくのは、一は炊夫の給料を始めとして廊下の電燈其他設備一切は縣費支辨だからだ、食事は一人一食につき白米が一合二勺麥が八勺の割合である。萩は非常に魚が安い處だから、魚だけは何處の學校よりも好いものを澤山食べて居るだらうと思ふ又日曜と水曜の晝には、特別に御馳走がある。ろれで一日が廿二三錢で濟ひのだから實際安い、と云つて決して惡い物ばかり食べて居るわけではない。左に一寸獻立表を揚げて見よう。

朝	晝	夕	
九月廿四日	味噌汁	白飯、鰯燒、汁粉	燒茄子
廿五日	奈良漬	燒魚	黒豆
廿六日	味噌汁	牛肉	茄子つけ燒
廿七日	鹽昆布	お萩、澄汁	ヤツコ
廿八日	味噌汁	鰯魚	カメラ豆
廿九日	金山寺	茶椀蒸	煮付
三十日	味噌汁	煮魚	カマボコ

當然の事かも知れないが、學力成績の通學生に比して優つて居る事も、我々の誇りとする一つであらう。先學期の成績表比較表を揚げて見ると左の通りだ。

學年	種別	人數	平均點數	八〇點以上者 人數	八〇點以上者 百分比	六〇點未滿者 人數	六〇點未滿者 百分比
第一學年	通學生	一一〇	六六	七	六、四	二五	二二、七
	舍生	三九	六八	四	一〇、三	八	三〇、五
第二學年	通學生	一〇七	六六	一三	一二、〇	三三	三〇、八
	舍生	二七	六八	〇	〇	一	三、七
第三學年	通學生	一〇〇	六七	一二	一二、〇	三〇	三〇、三
	舍生	二四	六八	三	一二、五	三	一二、五
第四學年	通學生	八三	六八	九	一〇、九	一九	二二、八
	舍生	九	七六	三	三三、三	〇	〇
合計	通學生	四〇〇	六七	四一	九、八	一〇七	二六、八
	舍生	九九	七〇	一〇	一〇、一	二二	一一、一

諸君の多くは舍の狀況を知られないだらうと思ふそこで甚だ概略だが、こゝに誠之學舍の狀況を紹介した次第だ。

運動競技講習會に就て

田邊武四郎
河上春亮
玉木利夫
村上定介

本縣教育會主催第一回陸上運動競技講習會は去る八月二十三日から山口高等商業學校前運動場で開催された。講習員百八十餘名は炎天をも厭はず、講師野口東京高等師範學校教授より熱心に指導を受け、五日を過して最終日の二十七日習得した事をそのまゝ實地に試みて終了した。我が萩中の生徒も、我々四人が、幸にも山本百合熊先生につれられて、此の講習會に入ることを得て、種々の競技を習つて歸りました。其の講習會の日割は次の樣であります。

一日を午前と午後とに別け、午前は七時半より三時間、午後は三時より二時間の講習を受けるのでありました。

第一日目は短距離競走のスタートと砲丸投を習ひ加ふるにプライングフイニシュとスローイングフイニシュ（決勝に入る時に於けるテープの切り方）を習ひました。

第二日目は走法とスタンデングステップ法と走幅跳、ディスカス（円競技）とを習ひ、講話として國際オリンピック競技會について出發合圖法とを習ひました。

第三日目は決勝審判員についての講話、中距離走法、槍投、ローハードル、ハイハードル、ホップステップジヤンプ、走高跳を習ひました。

第四日目はリレーレース、棒高跳及び長距離走法を習ひました。

第五日目は午前八時から小競技會が催され、次ぎの如き結果を納め、十一時から愈々講習會終了式に移り、本縣敎育會長代理中谷學務課長から講習員百八十二名（學生）六十五名（敎員）百十七名に對し講習證書を授與され、次で講師野口氏の戒告あり、來賓の祝辭等で閉會した。此の日のレコードは次の樣である。

▽百米突　A組一等谷岡（松山高校）十二秒五分ノ一
　B組一等原（山商）十二秒五分ノ一
　A組に萩中卒業生森君出しがにしくも破れ、B組に田邊君出しも之又破れた。

▽砲丸投　一等淺里（山商）十米十二
　河上君村上君出でしも又破れた。

▽八百米突　一等藤井君（岩中）二分十八秒五分一
　應井君は縣のレコード所有者である。玉木君出でしも終りの百米で遂に二等となりしは殘念であつた。

▽走幅跳　一等田島君（岩中）五米突四八
　二等も三等も岩中の手に歸した、萩中からは出る者はありませんでした。

▽二百米突　A組一等小原（出中）二十七秒五分二
　B組一等谷岡（松山高校）二十六秒五分四

▽円盤投　一等林（山商）二十五米五七
　田邊君出でたるも連日の勞れで破れた。

▽走高跳　一等松田君(岩中)五尺二吋
村上君出でたれど昨年のレコードより三吋の差を生じて敗北した。

▽四百米　一等谷岡(松山高校)五十八秒五分一
我が河上君間髪を入れずの接戦にて遂に二等となつた、タイムは谷岡君と同じである、

▽槍投　一等兒玉(岡中)三十九米

▽ポツプステツプジヤンプ　一等松田(岩中)十一米一三

斯の如くして競習會は終了した。

◎統計のいろ〳〵

○第一學年入學者。大正十年度には第一學年入學者百三十七名中、阿武郡出身が九十七人、大津郡出身が二十二人あつた。大正十一年度には百三十八名中、阿武郡出身が八十四人、大津郡出身が三十二人である。縣下の他郡出身は兩年度共に四人以下である。

○十月末日現在の調査に依ると、全校生徒五百九十四人の中、四峠內に原籍を有する生徒が二百六十二人居る。約半數に近い數である。其の二百六十二人の中、萩町に原籍を有する者が百七十三人である。

校　報

◎第二十二回卒業式

三月三日午前十時より、本校講堂に於て第二十二回卒業式を擧行せらる、學校長勅語捧讀の後、卒業生八十五名の總代に卒業證書を授與し、岡村阿武郡長、知事の告辭を代讀し、來賓瀧口吉良氏及在校生總代藤井勝三の祝辭に對し、卒業生總代吉武惠市の答辭卒業生父兄總代山根鐵三氏の謝辭あり、十一時三十分閉式、當日學校長の訓辭は別項講話欄に掲載せり、卒業生にして受賞せし者左の如し、

一、褒狀（縣知事より授與せられし者）
　吉武惠市　高田良雄
身體強健操行善良ニシテ能ク學業ニ勵精シ其ノ成績優良ナリ仍テ之ヲ賞ス（各通）

一、褒狀（縣知事より授與せられし者）
　上野玉市
身體強健操行善良ニシテ能ク學業ニ勵精シ其ノ成績顯著ナリ仍テ之ヲ賞ス

一、英和辭典　一部（特別賞）
　高田良雄
平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ學力俊秀ニシテ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ贈呈シソノ名譽ヲ表彰ス（各通）

一、英文和譯要訣　一部（特別賞）
　柏木直甫
平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ皆勤三ケ年精勤二ケ年ニ及ブ殊ニ職メタリト謂フベシ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス

一、英文和譯要訣　一部（一等賞）
　吉武惠市　上野玉市
學力俊秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、半紙　五帖（二等賞）
　石津兵太郎　神田壽治　惠本義正　村木曠
　石井淳　柴田俊夫　岩田芳夫　安藤次郎
　吉田博　篠原勝利　藤田憲一　鈴木勳
本學年間伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタルニヨリ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、賞狀（三等賞）
　高田良雄　鈴木勳　井原師郎　石井淳
　岩田芳夫　柏木直甫　普喜良衛　渡邊磐
　能美惠一
本學年間精勤セシニ因リ之ヲ賞ス（各通）

一、寫眞　一葉（萩中學校同窓會奬學賞）
　吉武惠市　高田良雄　上野玉市　村木曠
　吉田博　鈴木勳　山口縣立萩中學校卒業ノ際優秀ナル成績ヲ得ラレ殊ニ後進ノ模範タリ依テ前記ノ物品ヲ贈呈シソノ名譽ヲ表彰ス（各通）

卒業生氏名左の如し。（イロハ順）

岩田　芳夫　井原　師郎　伊藤喜兵衛　井町　吉助
石井　淳　石田　明　石津兵太郎　原　貞善
原田　潔　濱野　道介　仁尾　重視　堀　豐治
渡邊　磐　和田　修藏　河東　清春　花山　文雄
河原八重治　河内健吉郎　金子　豐　柏木　直甫
吉武　惠市　吉田　博　吉村　喜熊　田中　稔三
田中　儀明　田中　商一　田中　俊治　高田　眞雄
田村　豐　武田　憲雄　津田　龍夫　繼　織之進
内藤　貫之　内藤　軍吃　内藤　茂　中村　俊雄
中島　善鷹　村木　曠　上田　正夫　上野　玉市
野村　龍介　能美　潔　能美　惠一　小野　道治
黒川　克彦　國弘　重幸　倉重　新治　山田　毅
山根　眞一　前田　隆　松尾　忠義　松岡　城
松屋　鶴吉　松本喜八郎　福原　行德　普喜　良衛
藤田　健一　藤村　正憲　神田　壽治　江川　精
安部　貞夫　安藤　仁一　安藤　次郎　阿部　武
阿武　英一　齋藤　政武　佐々木正秀　北川　武彦
宮内　謙吉　安國　秀彦　柴田　敏夫　鹽崎　長久
白神　鴻一　篠原　勝利　島本竹次郎　澁谷　辰
惠本　義正　平山　保　平島信千代　森　豐彦
門田　省三　杉山　元彦　隅　元保　鈴木　勳
鈴木　正知

以上八十五名（本校創立以來卒業生合計一千二百六十五名）

◎卒業後上級學校進學狀況

第二十二回卒業生（大正十一年三月）にして、卒業後上級學校に進學せる者、當校にて分明せるは左の如し。

山　高　堀　豐治　柏木　直甫　田村　豐
前田　隆　桑田　敏夫
六　高　伊藤喜兵衛
五　高　吉武　惠市　上野　玉市
松山高　高田　眞雄
山　高　石津兵太郎　吉村　喜熊　藤田　健一
江川　精　安藤　次郎　田中　商一
神戸高商　神田　壽治
神戸商船　河原八重治　福原　行德
龍谷大學　武田　憲雄
京城高商　内藤　茂
大阪外語　中村　俊雄　松岡　城
陸　士　村木　曠
早　大　國弘　重幸　山根　眞一
熊本醫專　阿部　武
廣島高師　齋藤　政武
明　專　宮國　秀彦
早稻田高等學院　篠原　勝利
東京高等蠶糸　平島信千代
慶　大　隅　元保

因に四年修了生にして、高等學校に進學せし者左の如し

山　高　藤井　勝三　服部達太郎
五　高　竹内　忠雄

上記の通り、今回の卒業生の上級學校に進學歩合は極めて良好なり、知らず來年三月の卒業生の成績は如何、折角奮勵を望むなり尙大正十一年三月以降、當卒業生の上級學校に入學せし者を附記すれば左の如し

學校名	氏名	卒業年度	學校名	氏名	卒業年度
山口高商	中谷　由路	九	同　上	植田　浩	九
同　中	村　彰	九	山　高	厚東誠七郎	九
山　高	井本　清	九	同　同	大藤　豪	九
同　同	鈴木　研介	九	同　同	堀野　實	八
東京商大豫科	村出　春二	九	同　同	高林　安幸	八
東京商大專門部	坂田　武夫	八	四　高	磯松　鑛造	七
大阪高商大東京商大專門部	河村　東一	九	五　高	篠原　智雄	九
早稻田高等學院	富田　正次	九	東京美術	阿部　時彦	四
商船學校	守田　義秀	六	京都醫專	長井　博通	九
同　同	守田　吉光	九	大豫科	松屋初五郎	九
農業大學	阿部　弘	九	大豫科	石津　漣三	
山師二部	櫻井　武三	九	遞信官吏養成所	佐々木博介	九
同　同	守重　哲眼	九	同　同	守重　哲眼	九

本年度は舊卒業生の成績も良好なりき、參考の爲め前年度（大正九年度）に於ける、上級學校進學狀況に就て、縣下各中學校の比較表を掲ぐ。

本縣下各中學校大正九年度卒業生
其年上級學校選拔試驗合格率一覽表

同大正九年度四學年修了後上級學校選拔試驗合格者數

學校名	合格者總數	百分比 大正九年度	同　八年度	同　七年度	同　六年度	同　五年度
大正九年度卒業生總數	三一	三二	三四	三四	三〇	二四
高等學校	三	二九	二四	二〇	一九	一三
海軍機關學校						
陸軍士官學校	一	三	四	三	三	一
高等工業學校						
高等商業學校	二	六	八	四	七	二
醫學專門學校	二	六	八	四	七	二
藥學專門學校						
商船學校						
美術學校						
農科大學實科高等農林學校	一	三	四	三	三	一
外國語學校						
神宮皇學館						
東亞同文書院						
日露協會學校						
明治專門學校						
南滿醫學堂						
遞信官吏養成所						

縣立	合格者總數	山口	萩	豐浦	岩國	德山	周陽	興風
私立		六六	六	五四	五四	五〇	四一	
大正九年度卒業生總數	三一	一八	七	六	六	五	二	
高等學校	三							
海軍機關學校								
陸軍士官學校	一							
高等工業學校								
高等商業學校	二							
醫學專門學校	二							
藥學專門學校								
商船學校								
美術學校								
農科大學實科高等農林學校	一							
外國語學校								
神宮皇學館								
東亞同文書院								
日露協會學校								
明治專門學校								
南滿醫學堂								
遞信官吏養成所								

學校名	縣立						私立	
	山口	萩	豐浦	岩國	德山	周陽	興風	
高等學校	一〇	一一	八	二	六	二	一	
海軍兵學校	一	二	一	一		一		
海軍機關學校		二	一	一				
陸軍士官學校		一		一				
商船學校		一						
合格者總數	一二	四	三	四	一〇	三	一	

◎縣立學校生徒奬勵規程ニ依ル受賞者

四月八日新學年に於ける始業式あり、式後前年度に於ける第四學年以下の生徒に對し、賞品授與式あり、受賞者左の如し。

一、筆記帳　四冊（特別賞）

第三學年　井町　勇　第二學年　野村　久一　淵口　三郎
第一學年　田村　義雄

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ學力俊秀ニシテ伍長トナリテ能ク其任務ヲ盡シタリ依テ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、筆記帳　三冊（一等賞）

第四學年　本原　秀雄　藤井　勝三　第三學年　有田　勝正
第二學年　横山　幸正　倉重　達郎　第一學年　大和　忠雄

學力俊秀ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、筆記帳　二冊（二等賞）

第四學年　鳥居　勝　村木　正七　第三學年　來島　勝男
齋藤　彰　第二學年　那須　武夫　田中　松一　第一學年
櫻井平八郎　市原　茂樹　村木　忠治

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リ伍長トナリテ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、筆記帳　一冊（三等賞）

第四學年　岡　智敎　領野　孝夫　田坂　遠次　岡村　猛
箭島　薫　柿並　武夫　藤田　孝彦　竹内　忠雄　吉村　恒助
稻田保治　瀧口　寛作　村上　定介　山中　茂　第三學年
多田義男　池田　讓三　伊藤　貞一　平林三七雄　鹿島　國好
杉　丙三　井上　亮介　大山　岩雄　津田　嚴男　土田　伊平
板垣　肇　石丸　孝一　迫山　六郎　弘中　勝　第二學年
山本　浩　多田　利雄　木島　俊雄　吉田　勇　西田　義雄
内山　誠　佐伯　義治　大谷　正信　谷川　清　山中不二夫
山本　浩　第一學年　松浦兼三郎　佐伯　雅夫　岡村　登
中村四郎　永見　眞人　大島　政輔　岸　音熊　香川　俊男
中津桂三　阿武　義輔　長濵　誠三　松永　哲彦　廣　順一

本學年間伍長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、筆記帳　一冊（三等賞）

第四學年　柿並　武夫　吉村　恒助　稻田　保治　村上　定介
第三學年　有田　勝正　井町　勇　大岩　岩雄　弘中　勝

本學年間皆長トナリ能ク其ノ任務ヲ盡シタリ仍テ前記ノ物品ヲ賞與ス（各通）

一、賞狀（四等賞）

第四學年　神代　龍夫　横山　秀雄　松崎彌太郎
第三學年　青木　弘　丸尾　誠二　惠美須昌三吉　紀藤克二

森田　誠　小田　好長　和田　要
第二學年　三島　文平　常川　明　田北　泰　馬來　誠
林　不二雄　常川　治　弘長　賢一　山田　哲
久保田稔人　田中　誠　恒藤　雄磧　益田　篤士
第一學年　弘中　忠雄　賀屋　義明　金森　幸一　來島　正道
村木　喜八　篭田　壽男　久保　花月　石光仁吉良
梶村　治郎　藤原　茂一　平田　保雄　藤下　長俊
重本　正男　鈴木　幹　藤井　治良　國守　忠義
小崎　一郎　西村　隆雄　田村　季雄　村岡　幸作

平素勤勉ニシテ能ク校則ヲ守リタリ仍テ之ヲ賞ス（各通）

一、賞狀（等外）

第四學年　田坂　遠治　波多野義貫　田邊武二郎　村木勘三郎
第三學年　多田　義男　池田　謙三　田中　豐　吉賀　春一
波多野爲一
第二學年　堀　文吾　谷川　清　岩田　貞夫　高尾　延彦
中塚　俊二　阿字雄鯉溯
第一學年　金子　好雄　有美　邊　田原忠太郎　松永　哲彦
白井　格　中村　秀輔　吉村　理作　上野　武
瀧川　洋　三浦　八壽　富田　節美　波多野　公
村橋　藤次　大岡　鶴二　阿武　義輔　廣　順一
益田　兼清　藤田小太郎　松浦兼三郎

本學年間精勤セシニヨリ之ヲ賞ス（各通）

一、修身敎科書　一冊（同窓會奬學賞）

第四學年　頓野　孝夫　藤井　勝三　木原　秀雄　稻田　保治
原　吉雄
第三學年　有田　勝正　井町　勇　杉　丙三　土田　伊平
板垣　肇
第二學年　横山　幸生　野村　久一　多田　利雄　瀧口　三郎
倉重　達郎
第一學年　田村　義雄　大和　忠雄　櫻井平八郎　永見　眞人
大島　政輔

本學年間優秀ナル成績ヲ得ラレタリ依リテ前記ノ物品ヲ贈呈シテ之ヲ表彰ス（各通）

學制頒布五十年記念式

記念講演會と展覽會

十月三十日、本年は學制頒布五十年に當るを以て、記念式及通俗講演會、生徒成績品、本校所藏標本類の展覽會を開催す。

午前八時三十分、講堂に於て記念式は開かれたり、學校長は此の記念式を擧ぐる理由を、生徒に說明して大要左の如き訓話あり、

五ヶ條の御誓文に「上下心を一にして盛に經綸を行ふべし」及「智識を世界に求め、大に皇基を振起すべし」とありしは、實に學制頒布に至る遠源にして、啓蒙思想の盛に起ると共に、明治五年七月、學制頒布せられたり、本年は實に五十年三ヶ月に相當す三十年前の本月本日を以て、敎育勅語は下賜せられたり、依て特に本日を下して、此の祝典を擧げしなりと、學制頒布の由來を說かれ、我が國の學制は範を佛國に採りしも、小學、中學、大學等

の連絡は、之を米國の制度に學びたり、當時は日本全國を八大學區に分ち、各大學區を三十二の中學區とし、更に之を一千六百八十の小學區に分つ、即ち當時は大學を八校、中學校を二百五十六校、小學校を五万三千七百六十校創設する計畫なりしなり、中學校は人口十三万人に對し一校の豫定なりしが、現今山口縣は略十三万人に對し一校の割合になり居れり、此の學制は實に整然として一絲紊れざるものなりきとて、學制の内容を詳述せられ、更に語をついで、明治五年の布告を朗讀し、此の學制頒布を記念すると共に、將來の大計を定めざるべからずとて訓示を終はらる、式後生徒成績品及標本類の展覽會場を開放す、

展覽會は地歷部、理科部、書道部、畫道部に分る、何れも成績品の優秀なる物多く、人の目を惹けり、殊に理科部に於ては、萩中はみがき粉、萩中ソース、ベルツ化粧水等の特製品頒賣あり、室内煙火、活動寫眞、蓄音機、眞空管、エツキス光線等の實驗あり一般觀覽者も多かりき。

午後一時より通俗講演會は講堂にて開かれたり、講演要旨左の如し。

教育上の二大缺陷問題　岩田學校長

維新以後急激なる文化開發の必要に迫られ、我國の教育は偏りに智の教育に偏し、情と意との教育は閑却せられたり、教師も智の注入に急にして、情と意との陶冶を忘り、生徒も智識を受動的に吸收するを以て能事終れりとなす、新に研を出でし刀は最も能く切れざるべからず、新に學校を卒業せし者は最も手腕ある人物ならざるべからず、然るに事實は之に反すること多し、之學校時代に單に智識の吸收に努めし者を以て、優等生となす今日の教育上の一大缺陷といふを得べし。

我國教育上の第二の缺陷は、大人教育の缺けたること之なり、教育といふことは、年齢や學校に制限せらるべからず、大人教育の最も能く行はるゝは丁抹にして、世界の範とすべし、丁抹は農業本位の國なり、故に農民教育の行はるゝこと見るべきものあり、農民學校といふべきもの多く設けらる、之は啻に農民として必要なる科目を教授するのみならず、歷史、文學、法律、經濟、理科等社會に活動するに必要なる常識を授くるを目的とす、通例男子は冬季六ヶ月、女子は夏季三ヶ月を以て授業す。

英國にては商工業を以て、大人教育の主眼とす、一八五二年モーリスの創立せし勞働大學は夜間に授業せり、彼は基督教的社會主義を信奉せし人にして神の教は公正を基とすといふが彼の信念なりき、女子勞働大學は三十歳以上、五十歳迄の廣義の女子勞働者に、晝間教授するを以て目的とせり、筋肉勞働者のためホール夫妻はプロレツト、カルトを創設したり、プロレツトカルトとは勞働者の教化の意なりと、尚多くの英國に於ける教育のデモクラシーの例を說明し、ユニバシチー、エキステンションも說明せられたり、又獨逸が戰後大人教育に就て劃策することを論じ、我國に此の制の缺けたるを痛嘆せらる。

最後に俗諺の「飛んで火に入る夏の虫」の例を惹き、吾人は時代と共に進歩し、之に適應するを要す、ショーンペンハウエルが、「歷史家は後向の豫言者、法律家は横向の道德家なり」といへるを引用し、吾人は單に過去を反省するのみならず、將來に向て意

を注ぐべきなりと論じて降壇。

我國固有の思潮と武士道に就いて　中津江教諭

日本固有の思潮は、島國なりし爲め、氣候が温帶にして人民の勤勉なる爲め等の外部的事情、民族の純一、皇統の一系、家族制等の内部的事情に依りて發生したりとて、日本固有の思想の發生の原由を說き、ロンドンタイムスの社說、中等學校長會議に於ける桃山中學校長の所說を惹き、武士道の尊ぶべきことより、武士道の淵源に入り、源平二氏の比較あり、德川時代に武士道の大成せるを說明し、源平二氏の比較あり、德川時代に武士道の大成せるは、山鹿素行と松陰先生とが與つて力あること、素行と赤穗義士との關係、素行の兵學と松陰先生の家學とに就ての系統等を述べ武士道の德目は「勇」「克己」「忍耐」「禮儀」「清廉」等を主とし、吾人の大いに修養すべきなりとて、武士道の說明あり。

アインシュタインの特種相對性原理　村岡教諭

ラツセルはレーニンとアインシュタインとを以て近世の二大偉人とせりとて、アインシュタインの偉大なる所以を說明し、一九一六年彼が一般性相對性原理を世に發表するや、世界の驚異となりしこと、その說の難解にして世界に十二人の外には、之を解する者なかるべしといはれしことより、時間、空間等に關する從來の理論に革命を起せしこと、エーテルに關する理論、光の理論等の變遷より、諸家の學說を說明し、時間空間質量の相對的なるを論じ更に彼の經歷を說いて、多くの表に依りて說明せられたり。

午後四時半、講演終了、改めて展覽會を見る人もあり、盛會裡に此の祝典を終る。

◎先生の更迭

大正十年十一月より、大正十一年十月に至る滿一箇年間に先生の更迭せられたるもの左の如し。

△駒田卯三郎先生、大正十年十一月十七日、長崎縣立豐岐中學校より來任せらる、英語科擔任。

△末七太郎先生、大正十一年二月十日、石川縣立第一中學校に轉任せらる。

△横山眞晴先生、大正十一年三月三十一日、新に就任せらる、國語漢文科擔任、因に先生は本校第十八回の卒業なり。

△頓野多介先生、十一年三月廿五日、本職を退職せられ四月廿日改めて英語科教授を囑託せられた。

△安藤紀一先生、三月廿七日、本職を退職せられて、四月廿日改めて國語漢文科教授を囑託せられた。

△大本信雄先生、三月三十一日、山口縣立周東學校教諭に榮轉せらる。

△村岡徹介先生、四月六日、新に本校教諭に就任せられた、物理科擔任。

△落合兼文先生、四月六日、退職して朝鮮京城に赴かれた。

△黒川久米次郎先生、四月廿八日、宇部工業學校に榮轉せられた

△伊藤恒先生、七月一日、大分縣立宇佐中學校より來任せられた英語科擔任。

△横山眞晴先生、九月廿七日、病氣の爲に退職せられた。

△板垣克先生、十月十六日、本校教諭に任ぜられた、先生は本校

第十九回の御卒業にして、從來奈良市食料株式會社に奉職せられしが、今回母校の爲め物理化學科を擔任せらるゝことゝなつた。

△本間孝先生、十月十六日、本校國語漢文科教授を擔任せらるゝことゝなつた、先生は從來廣島市教員講習所に奉職せられたのである。

◎大正十一年度學友區幹部

大正十一年度學友區幹部左の如し、但、小區友長及副友長は選擧の結果當選せるものなり。

東萩學友區長　田中先生

第一小區	友長	木原　秀夫	副友長	長濱　俊雄	
第二小區	友長	岡　智敎	副區長	三好　治雄	

西萩學友區長　船木先生

第一小區	友長	稻田　保治	副友長	村上　定介	
第二小區	友長	頓野　孝夫	副友長	清田　清華	

南萩學友區長　金子先生

第一小區	友長	波多野義貫	副友長	瀧口　三郎	
第二小區	友長	鳥居　勝	副友長	北村　三郎	
第三小區	友長	山中　茂	副一長	川上　春亮	

北萩學友區長　中津江先生

第一小區	友長	井上　亮介	副友長	土田　伊平	
第二小區	友長	堀　娥	副友長	大島　太郎	
第三小區	友長	玉井　忠彥	副友長	折本　秀顯	

中萩學友區長　土肥先生

第一小區	友長	王木　利夫	副友長	長樹武四郎	
第二小區	友長	岡村　娥	副友長	中村　重藏	
第三小區	友長	堀永忠次郎	副友長	久保田五六	

椿東學友區長　村岡先生

第一小區	友長	横山　秀雄	副友長	桂　博之	
第二小區	友長	村木　正七	副友長	田邊竹次郎	
第三小區	友長	鷲頭　龜治	副友長	山本　娥	

椿學友區長　田總先生

第一小區	友長	山根　次郎	副友長	津崎平八郎	
第二小區	友長	石丸　孝一	副友長	藤田　繁一	

山田學友區長　山本(百)先生

第一小區	友長	神代　龍雄	副友長	吉屋　信若	
第二小區	友長	江川　滿一	副友長	熏美衆屋三吉	

◎統計のいろ〳〵

○九月末日現在生徒數、一年一五〇、二年一三七、三年一二六、四年九八、五年八三、合計五九四、

校誌

（自大正十年十一月　至大正十一年十月）

○視學委員來校、大正十年十一月一日、本縣中等學校數學科視察委員囑託、廣島高等師範學校教授角達介氏來校、數學教授を視察す。

○講演參聽、十一月五日、明倫館に傳書鳩に關する講演を聽く。

○視學委員來校、十一月八日、本縣中等學校英語科視察委員囑託廣島高等師範學校教授葵沼平治氏來校、英語科教授を視察す。

○辯論部大會、十一月十九日、辯論部大會擧行、（別項參照）

○松陰神社參拜、十一月廿一日、松陰神社秋季例祭につき、講堂に於て松陰先生追慕會擧行、金子教諭の講話あり、午後一時より教員生徒一同松陰神社に參拜す。

○鄉土史研究會、十一月廿五日、鄉土史研究會第九回例會開催。古川敎諭の喜田博士の古代史研究の紹介あり、鄉土史研究上會員の得る所多かりき。

○視學委員來校、十一月廿九日、本縣囑託物理科視察委員、明治專門學校教授友田鎭三氏來校、視察あり、午後講堂に於て電氣に關する通俗講話を行はる、第三學年以上の生徒、四峠內小學教員郡視學、稅務署長、間稅課長等聽講す。

○發火演習、十二月五日、三見村字五石附近に於て、第四、五學年生徒の發火演習を行ふ。

○終業式、十二月廿四日、第二學期終業式を行ひ、展覽會及辯論部賞與授與式あり、尙四學年生益田敎義に對し、縣知事の賞與を傳達す、（別項參照）

○寒稽古、大正十一年一月十日、本日より向二週間武道寒稽古開始、

○武道大會、一月廿四日、武道大會擧行。

○鄉土史研究會、二月三日、第十回例會を開く、講演左の如し。

厚東氏百万塔之由來　岩田校長

香川津二孝子の話　金子敎諭

同　安藤敎諭

○長途競走、二月四日、午後長途競走擧行。

○山縣公國葬、二月九日、故樞密院議長元帥陸軍大將大勳位功一級公爵山縣有朋國葬執行につき、萩町川島公爵誕生地に於て遙拜式あり、生徒一同參會す。

○紀元節、二月十一日、紀元節拜賀式擧行、式後武道寒稽古皆勤者、精勤者に賞狀授與、及、長途競走優勝中隊（第二中隊）、優勝小隊（一等第二中隊第二小隊、二等第一中隊第三小隊）に優勝旗及賞品を授與す、同日末先生告別式あり。

○學力比較試驗、二月十七日、午前八時より、縣下中等學校第四學年生徒の國漢、英、數學の學力比較試驗執行、立會人として萩高等女學校教諭中野貞介、阿武郡書記兼郡視學溶金治の兩氏來校二月十八日も同樣執行。

○久保田氏講演、二月廿七日、明倫館に於て旅順驛長久保田金平氏の講演あり、生徒一同參聽。

○卒業式、三月三日、第廿二回卒業式擧行、長官代理として岡村阿武郡長の告辭代讀あり。
○井上少將講話、三月六日、明倫小學校に於て、午後一時より井上陸軍少將の軍事講話あり、第三學年以下の生徒聽講す。
○入學選拔試驗、二月廿八日、中學校入學選拔受驗資格學力檢定試驗を行ふ、受驗者二名にして、一名合格せり。
○入學試驗、三月廿九日、第一學年入學試驗を行ふ、志願者二百九十八名にして缺席者二十三名なり、同日第三學年補缺入學試驗を行ふ、志願者一名なり、三十日も同樣施行、三十一日第一學年入學生徒の成績を發表す。
○始業式、四月八日、始業式擧行、前學年度の第四學年以下の生徒に賞品授與、頓野、安藤兩先生退職、村岡、横山、山川三先生の新任式あり。
○秋重技手講話。四月十日、山口縣衛生技手秋重常太郎氏の狂犬病に關する講話あり。同日落合先生の告別式擧行。
○入學式、四月十一日、新入生入學式擧行、採用人員は百三十七人。
○志都岐山神社參拜。四月十五日、志都岐山神社例祭につき敎員生徒一同參拜、同日新舊生徒對面式を行ふ。明倫館に於て國府種德氏の長門峽に關する講演あり、生徒には隨意參聽せしむ。
○中學校長會議。四月廿四日、圖書館に於て縣下中學校長會議開催せらる。岩國、豐浦、德山、周陽、下關、宇部の各中學校長出席、縣廳よりは中谷理事官臨席、正午福原男爵も來臨せらる。
○知事出巡、四月廿六日、橋本本縣知事來萩、直に志都岐山神社に參拜につき、敎員生徒一同同神社に出迎ふ。
○知事來校。四月廿七日、橋本知事來校、生徒に訓話あり、縣土木技師城崎千駿、官房主事縣屬中村鎭雄の二氏隨行、厚東、田原、林の三縣會議員、岡村郡長、沖原警察署長等同行せり。
○修學旅行、五月一日、第四學年生徒修學旅行にて出發、同月五日一同無事歸萩す。
○遠足。五月六日、遠足擧行、五年生は倉江譯山に、三年及二年生は笠山に、一年生は萩町史蹟を探訪す。
○衛生講話。五月九日、山本校醫より、膨窒扶斯及脚氣豫防に關する講話あり。
○黑川先生告別式。五月十日、黑川先生の告別式を行ふ。
○山縣公百日祭。五月十一日、本願寺別院にて故山縣公の百日祭追悼會あり。敎員生徒一同參拜。
○松陰神社參拜。五月廿五日、松陰神社例祭につき、敎員生徒一同參拜。
○漕艇大會。五月廿七日、海軍紀念日につき學校長の講話あり。其の後橋本川に於て漕艇大會擧行。
○辯論部大會。六月十九日、辯論部大會擧行。
○鄕土史談話會。六月廿七日、第十一回例會を開く、左の講話あり。

洋學者中島治平の傳　安藤先生

○武道大會。六月廿八日、武道大會擧行。
○伊藤先生新任式。七月四日、伊藤先生の新任紹介式あり。
○終業式。七月廿日、第一學期終業式あり。式後辯論部賞品授與

○矢田部生葬儀、八月二日、第四學年生矢田部嘉友葬儀につき、敎員及在萩中の生徒會葬す。
○游泳講習會。八月六日、游泳講習會本日より向二週間開催、本日菊ヶ濱に於て開會式あり。八月十九日閉會式を行ふ。
○黑瀨內務部長來校。九月十一日、黑瀨本縣內務部長、渡邊縣屬を隨へ來校。
○田中大將講演。十月十四日、明倫館にて田中大將の講演あり、生徒一同聽講す。
○優勝旗を得たる披露式。十月十六日、前庭に於て擧行。同日、世界探險旅行家菅野力夫氏の講話あり。
○運動會。十月十八日、第廿三回開校記念日記念式あり。式後運動會擧行。記念式には毛利公爵の來臨あり。松浦貞固氏祝辭を述ぶ。
○大塚明專校長講話。十月二十六日、明治專門學校敎授大塚成實氏の理學に關する講演あり。本日伊藤博文公の臨時祭典あり。河野敎諭總代として三年生以上生徒總代引卒參拜す。
○學制頒布五十年式典。十月三十日擧行、別項參照。

◎統計のいろ〳〵

○本年度第一學年入學志願者及入學者學歷に關する調査

尋卒の者	入學志願者	一四一	入學者　七三
高一修了の者	入學志願者	九〇	入學者　三二
高卒の者	入學志願者	六五	入學者　三一
尋五卒者	入學志願者	二	入學者　一
合計	入學志願者	二九八	入學者　一三八

◎長距離競走成績表

大正十一年二月四日施行の長距離競走成績を記載すれば左の如し

等級	出發順	隊號	總員	不參加人員	出發人員	落伍人員	到着人員	經過時間	平均一人時間
一	六	一ノ一	一四	一	一三	一	一二	三五分二六	七八分〇一
四	一〇	一ノ二	一四	一	一三	一	一二	三六、一五	五五、一三
二	二	一ノ三	一四	一	一三	一	一二	三六、三〇	四八、〇四
合計		一	一三六		四一	八	八七	一	二〇、二五、六六
六	五	二ノ一	一四	一	一三	三	一三	三七、四一	五五、五七
一	一二	二ノ二	一四	一	一三	三	一三	三六、四〇	四二、三二
九	九	二ノ三	一四	一	一三	七	一九	三七、二〇	六二、〇九
合計		二	一四二		三九	一〇	二八	二	五三、三二、六六
八	三	三ノ一	一四	一	一三	一	一三	三七、五三	五七、一三
二	七	三ノ二	一四	一	一三	三	一三	三五、二六	六八、一四
三	一四	三ノ三	一四	一	一三	一	一三	三六、四五	五二、二七
合計		三	一四四		三九	五	三九	一	五九、一〇
五	四	四ノ一	一四	一	一三	一	一三	三八、五〇	五五、五一
一〇	一二	四ノ二	一四	一	一三	一	一三	三五、一七	六三、三〇
七	一五	四ノ三	一四	一	一三	二	一二	三六、二四	五六、二〇
合計		四	一三七		四〇	四	三六	一	一八、二七、〇六

總評　第一等　第二中隊　第二等　第四中隊

第三等　第三中隊　第四等　第一中隊

十月三日、午後三時より秋季庭球大會を開く、此の日薄雲滿天を蔽ひ、風死して所謂絶好のテニス日和なり。好球兒の血湧き、肉躍る。

試合は丸尾、上田の兩組の始球仕合により始まる。サーブの急撃、熱球の連發、巧球、鬼球の亂撃、愈々急に、愈速、かくて第二回戰の終る頃、夜の幕は垂れ、試合を繼續する能はざるを惜しむ。當日のメンバー左の如し。

第一回戰

（弘中4 丸尾4 三―一 中村3 上田3）
（村木5 下村5 〇―三 守重1 津森1）
（柿並5 仁保5 三―一 三浦5 堀永5）
（三輪4 杉4 一―三 金子3 中津江4）
（岡部3 安達3 一―三 田中5 和田5）
（首藤4 下瀧1 二―三 永田2 田中2）

第二回戰

（柿並三―一 櫻井2 津田2）
（永田 田中三―二 山根5 秋枝5）
（金子 中津江〇―三 弘中 丸尾）
（守重 津森三―一 末岡4 前原2）
（田中 和田二―三 桂5 守重2）

第二回戰中最も接戰を演ぜしは永田組對山根組、及び田中組對桂組にして、共に技倆伯中なり。田中2巧に敵の逆モーションを突き、秋枝又得意のロビングを以て敵を惱ます。永田巧妙なるスマッシングをもつて敵の牛ロビングを取る。山根の牽制鮮なり。されど時に利あらずして遂に山根組敗らる。

田中5和田の鮮なる打球振り及びモーションはともに滿場の賞讃を博せしが、敵亦よく力戰して益々その技倆を發揮し、和田の勇者も遂に之に屈す。

十月五日。午後二時第三回戰より開始す。

第三回戰

（桂 守重三―二 守重 津森）　（永田 田中三―二 弘中 丸尾）

弘中丸尾の活動共に觀衆の目を引けり。

準優勝戰

（永田 田中三―二 柿並 仁保）（不戰三勝）

ラスト、ゲームの如きはジュースアゲン四回、實に火花を散らしての接戰を演ず。仁保得意の急擊なるサーブにて敵の荒膽を奪ひしも、永田の巧妙なるボーレーに最後の大切なる一球を得られて惜しくも敗北す。

優勝戰

（永田 田中三―二 桂 守重）

優勝戰とて滿場のフアン、手に汗を握り、固唾を呑む。永田、田中の兩者は再三度の奮鬪にも少しも疲勞の色なく意氣益々揚る。守重得意の熱球を以て常に敵を突きしも、田中之亦得意のロビングにて能くこれを打ち歸す。永田桂のモーション共に鮮なり。かくて永田、田中優勝す。

（T K 生誌す）

◎野球部記事

六月二十日、午後一時四十分駒田先生の鮮やかな始球式あり。後四中隊對三中隊の競技行はる。メムバー左の如し。

三中	三廣	阿坪	守大	長益	西			
四中	浦中	武井	重橋	濱田	村			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
四	長和	田紀	田丸	村山	久			
中	嶺田	中藤	坂尾	木田	田			

四中軍の先攻、劈頭田中丸尾の犧牲打により一擧本壘を襲ひ、一點を得、三中隊三人共凡打に終る。第二回兩軍共無爲。第三回四中軍參點を得、三中軍無爲。第四回四中軍無爲、三中軍一點を得第五回兩軍無爲、第六回四中凡退、第三中隊一點を奪ひ、第七回四中凡退三中又凡退す。第八回四中三人三振、三中此の度は大いに盛り返し三點を加へ一點勝越す。四中軍最後の攻擊を試みしも終に得る能はず、五對四の接戰にて三中の勝に歸す。

六月二十一日、第一中隊對第二中隊の試合を行ふ。メンバー左の如し。

一	堀北	平上	三平	村玉				
中	永村	林村	輪田	上木	杉			
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
二	前永	下吉	田山	田岩	石			
中	原田	村村	原根	邊田	丸			

第一中隊優勝を期せしものか最初より活氣なく、中隊の試合にては稀に見る大スコアーにより、八回にて終る。得點三十五對二十

三、一中軍の勝利。

六月二十二日、綠蔭村岡先生、壘審岩田先輩の下に第一中隊對第二中隊の決勝優勝試合を擧行す。メンバー左の如し。

一中	杉村	北林	平村	上田	三村	平上	玉木	堀永	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9
三中	阿武	弘中	三浦	坪井	守重	大橋	長濱	益田	西村

第三中隊先攻、第一回兩軍凡退、第二回三中無爲一中先づ二點を得、第三回一中軍善く守りし爲、三中好機を逸せり。唯一點を得しのみ。第四回三中三點を得、一中又一點を得て同點となる。初より緊張せし試合は愈々其の極に達せり。第五回三中一點を得。然るに第六回又一中一點を奪ふ。第七回三中一點、一中無爲。第八回兩軍無爲。第九回三中三點を得、一中軍又振ひ、三點を加へしも八對七にて名譽ある月桂冠は三中軍の手に歸したり。

（北村記す）

◎辯論部記事

澎湃として押寄する世界的思潮の巨濤は、其侃々諤々の響をやめ様とはせぬ。過古に松陰先生、伊藤公、山縣公の諸先輩を出した此處秋の一角に起つて、靜かに剛健の意氣、質實の氣象を修養する我等は、徒に過去の美をのみ謳歌しては居られない。何時までも其思想をのみ凝視しては居られない。過ぐる六月十五日は恰もよし、我が辯論部大會で、醇朴眞純な登壇者の口より、舌頭烈火

万丈の氣焰が吐露せられた。其のプログラムを擧ぐれば左の如し

一、開會の辭	部長	石川	先生		
二、我身をつめて人の痛さを知れ	二年	内田	元隆君		
今少しく自重考慮あれ					
三、海に發展せよ	三年	山本	浩君		
言明快理論剴切たり今後の奮闘を祈る					
四、日本人と生れたる我が喜び	二年	有美	邊君		
前口上長し、議論々題に添はざるの感あり					
五、爆藥の紛失	一年	柳井	敏三君		
滿堂を壓するの意氣、熱烈なる語調、眞に當會出演者中の花形たるを失はず。我部の爲君の自重勉勵を祈る					
六、健全なる思想を養へ	三年	田北	泰君		
雄辯なれども音調低きに失せるの感あり					
七、此の主義を宣す	五年	藤田	昇君		
辯舌巧なるも論旨の不分明と音調少しく低かりしは惜む可し					
八、智慧伊豆	一年	伊勢屋泰禮君			
言論内容に今少し意を拂はる可きなり					
九、修學旅行談	四年	井町	勇君		
十、有辯に非すして無辯	五年	山本	趙夫君		
即席演説として君の技巧感服の外なし					

加ふるに四年生一同は討論「都會か田舍か」を行ひ、五年生一同は午後より直に「創業と守成と何れが難きか」に關して頗る猛烈なる討論會を行へり。

猶本日は、河野先生の斡旋にて、本校卒業生にして目下玉木病院に奉職中なる和田渉氏、及萩町出身にて目下大連にありて新進貿易家として聲名を博せる大島甲槌氏を聘し、有益なる講話ありたり。和田氏は日蓮の人格に就て、大島氏は大連の人情、風物に就て熱烈なる雄辯を振はれたり。茲に謹んで感謝の意を表す。

（委員　山本　藤田記）

◎漕艇部記事

五月二十七日、皇國の光榮を記念すべく我校友會漕艇部は、大會を阿武の清流橋本に擧行した。當時を偲ぶ強風、晴天の下、午前九時半開會、第一回より第七回までの個人競漕は三中隊の最大得點（一二）、次點は四中隊（一一）である。次回の選手豫選競漕は三中隊中途棄權し、四中隊の勝利となる。一中隊二中隊の豫選に於ては二中隊の勝利。午後の個人競漕は三中隊四中隊同點で（一六）總計して此日の個人競漕は三中隊の捷となつた。十七回の個人選手及來賓競漕と五年クラス競漕とを盡く終へて愈選手決勝競漕となる。二中隊は北岸に、四中隊は南岸に、兩軍の浪逆巻いての應援振元氣漲つて天に溢るる雄々しさ勇しさ！戰の結果は一等二中隊十分五十二秒五分四、二等四中隊十一分一秒で榮あるこの日の月桂冠は二中隊の頭に飾られた。時に五時四十一分終つて優勝旗授與、個人競漕では第三中隊選手競漕では第二中隊共に翳す陣頭の優勝旗、歡呼の聲に守られて凱旋の榮光平和の象徴と輝く、折からの夕陽にひら〳〵と飜ればその影は洋々の流に映るのだつた。

因に各中隊選手名を揭げておく。

第一中隊	第二中隊	第三中隊	第四中隊
繩田 寛悟	伊藤 貞一	惠美須屋三吉	兒玉 正
柳田 俊夫	來島 勝男	村木 喜八	增野 忠
富田 清次	石丸 孝一	澁谷 清一	末岡 源七
卜部 實雄	田中 豐	岡田 友一	阿武 四郎
植村 敬	岩田 貞夫	小方 數馬	小橋 一義
北村 三郎	津崎平八郎	山根 次郎	稻田 保治
玉木 利夫	田邊竹二郎	岡村 城	河上 春亮

來賓競漕結果

第一回	一等	警察署	二等	中學校職員	三等 郡役所
第二回	一等	萩中卒業生	二等	萩商生徒	三等 萩商生徒

（記錄係記す）

◎柔劍道部記事

大正十一年十一月一日、武道大會を開催す。

【劍道】第一中隊對第三中隊試合に於て、第三中隊不戰者六名を殘して勝つ。第二中隊對第四中隊試合に於て、第二中隊不戰者二名を殘して勝つ。第二中隊對第三中隊の決戰成績左の如し。

第二中隊	第三中隊
横山 幸	弘 長
田邊竹	宇田川
鳥 居	桂

高村　阿武省
來島　池田三
杉山直　小方數
青木　岡田
山根芳　井町
菊永　神野
水原　江川
都野　玉井
田部　長濱俊
石丸　內藤
伊藤貞　憲美須屋
下村　守重眞

第三中隊の優勝に歸す。

受賞者

宇田川重雄　神野　克巳　高村　忠雄　石丸　孝一
守重　眞雄　鳥居　勝　玉井　忠彥
第三中隊選手十五名

柔道　中隊選手試合固業に於て、二中隊對四中隊は四中隊の勝、一中隊對三中隊は三中隊の勝、三中隊對四中隊決戰四中隊優勝。投業に於て、一中隊對二中隊は一中隊勝、三中隊對四中隊は四中隊勝、一中隊對四中隊決戰四中隊優勝。固業投業共に四中隊は大將村本始終不戰にて優勝す。決戰成績左の如し。

（固　業）　（投　業）

三中隊　四中隊　四中隊　一中隊
三浦不二夫　○增野　忠　增野○　田中　仁
弘中　優　佐伯　義治　佐伯　竹內六郎
源　龍三郎　藤田　昇　藤田　○繩田寬悟
村田　清男　○長濱武四郎　長濱◎　村上定介
大將西村　秀隆　大將村本正七　村本　堀上孝助

當日受賞者。四中隊選手五名及外十五名（對中隊選手試合及學年個人拔試合に於て得點○○十×以上）。

一年　○○○○白石　○○○田中　村本　○○○木村　○○　綿貫
○○久保田　伊勢屋　二年　○○○○國守　○○○藤田定　○○村岡
○○永田　○○戎原　三年　○○　+○○藤田鶴雄　五年（中隊）
○○長濱　×○三浦

◎京都青年演武大會記事

大正十一年八月四日より、八日に至る間、大日本武德會本部主催にて、京都武德殿に於て、第二十三回青年演武大會開催せらる。本校出演選手成績左の如し。

本　校○○（長濱正博）　本　校○○（石丸孝一）
靜岡沼津商　（市川　昇）　京都東山中○○（內田近一）
本　校×○○（內藤昌（代伊藤））　本　校○○（杉山直人（代玉井））
京都一商　（和田吉之助）　大阪天王寺中（谷口敏夫）

本　校○○（玉井直彥）　本　校○○（江川滿一）
大阪八尾中　（柏井光武）　三重富田中×○（糟間德男）
本　校　○（伊藤貞一）　本　校　卒○○（岩田芳夫）
鳥取師範　○（難波嘉藏）　○（竹中鬼一）

團體試合

本　校　福岡八女中學校
江川　滿一　○嶺枕　千郷
伊藤　貞一　○高井眞友藏
石丸　孝一　○近見　薩
長嶺　正博　○田中　常人
玉井　忠彥　○角　健平
計十七點　計三十九點

以上劍道之部

本　校○（村田　清男）　本　校○（長嶺武四郎）
茨木中（北島　勇）　御影師（萩野　利夫）
本　校×（秋枝　純逸）　本　校×（堀上孝助）
京都師（岩井　元嗣）　京都二中（關　學而）
本　校○（村水　正七）
御影師範（湯口吉太郎）

團體試合

第一回戰

本校對滋賀縣長濱農學校なりしが、長濱農學校棄權して、本校不戰勝者となる。

第二回戰

本　校　岐阜中學校
村田　清男　×　關　武男

○秋枝　純逸　遠藤　貞二
○堀上　孝助　村瀨　和亮
長嶺武四郎　○福田　收
○村木　正七　坪內　俊方

第三回戰

本　校　中學岡山聲
村田　清男　○奧山　弘
秋枝　純逸　×　近藤　虎雄
堀上　孝助　○今田恭二郎
長嶺武四郎　×　安東　安齋
○村木　正七　大森　幸二

以上柔道之部

◎縣教育會主催體育會

村上定介

縣教育會主催體育會は、豫定の如く、十月十五日高商グランドで擧行された。會する各中等學校の選手は、萩中を北方の勇者として恐れて居た。それだけ今年選手として行く我々の責任の重大であるのを感ぜずには居られなかつた。

十四日午前七時半、我々九人の選手は（但し村木、玉井をのぞく）自動車で萩を出た。途中唯我々の頭を去らないのは光り輝く優勝旗であつた。十時半頃山口に到着、少時休憩の後、皆一所に高商グランドに足練習に行く。宿に歸つたのは午後一時頃であつた。

夕食まで休憩、食後は八時頃まで築戰なし、八時半頃床に就く
朝からの雨は未だやまない。
前日の怪しい雲行に今日も陰りはせぬかと氣遣はれた天候も、當日たる十月十五日の高商グランドは、秋の光を隈なく受けて、我等が競技の幸先を祝はんとするものの樣である。午前八時各校選手はフイルドの中央に整列し、開會の式は擧げられた。戰の幕は午前八時半、當日の序幕戰なる百米豫選競走によつて切つて落された。

競技の成績

百米競走
一等　村上（本校）　十一秒五分の四
二等　小原（山中）　三等　西村（鴻中）

二百米競走
一等　高須（山中）　二十五秒五分の三
二等　荒木（曹中）　三等　來島（本校）

四百米競走
一等　河上（本校）　五十八秒五分の一
二等　小原（山中）　三等　三宅（國中）

走幅跳
一等　大村（曹中）　五米八五
二等　田島（岩中）　三等　小野（本校）

走高跳
一等　松田（岩中）　一米五七
二等　今井（山中）　三等　小野（本校）

ホップステップジヤンプ
一等　村上（本校）　十二米一〇
二等　大村（曹中）　三等　松田（岩中）

千六百リレー
一等　本校（來島、小野、玉木、河上）　三分五十二秒五分の一
二等　山師　三等　山中

砲丸投
一等　村木（本校）　九米八六
二等　林（山中）　三等　西山（豊中）

戰終へて
我が萩中軍は遂に勝利を得た。夢の優勝旗は今は現の優勝旗として、我等の陣頭に立てる事が出來た。然し此の盛大の今日あるはあの日光天地を燒く樣な夏の日も毎日々々怠らず練習した我が選手の力によるのである。高く飛ばんとする鳥は、先づ體を低くかゞむ。同樣に大なる事業をなさんとする者は、永き準備をなさざるべからず。今年は幸に勝ちたりとも、此の優勝旗は永久に我が校のものではない。來年は又山口のグランドに飾られるのである而して此の旗を又我が校のものとするのは、後輩諸士の努力によるのである。願はくば諸士の奮起せられる事を。

◎縣教育會主催體育會武道部記事

武道部記事劒道部の本校出演選手成績左の如し。

守重　眞雄（勝）　長嶺　正博（勝）　伊藤　貞一（負）

玉井　愚彦（勝）　下村　定儀（負）

拔試合四等賞に下村君入る。

柔道部の本校出演選手成績左の如し。

周中×（河野　菊壽）　本校○○（秋枝　純逸）
本校×（村田　清男）　曹中　（明石　源明）

國中×（余村　廣雄）　德中　（山本　元熊）
本校×（堀上　幸助）　本校×（長嶺武四郎）

鴻中　（野村　辰雄）
本校○○（村木　正七）

◎地歷部記事

本年は全體として昨年に比し向上の點が見ゐなかつたのは殘念であつた。作品中地圖の外貌を裝はんが爲縁の模樣が俗になり、却つて惡感を與へたものがあつた。どこまでも着實に内容の充實した智識の活用的な作品を奬勵する。

然し二年窪田君作模型圖の精巧極緻、同大和君作「薩哈連州地圖」は西比利亞撤兵を動機として同地の狀況に對する徹底的な智識の發露、四年堀永君作「同胞の活躍すべき舞臺」の着想の妙着實な筆の跡、同藤成君作「歐羅巴洲」の倦まざる努力、此等は實に人目を驚かした。尙將來益々御精勵ありて我部の發展を期せられんことを。

◎書道部記事

我校の展覽會は、開校記念日を卜して、開催するを常例とせしも本年は、學制頒布せられてより、五十年に當るを以て、特に、その記念式日十月三十日を以て開催せり。而して、我書道部展覽會は、午前八時より午後五時まで、一般公衆の觀覽を許されたり。本年は昨年と同じく、學校に於て、教師監督の下に、一定時間内に、書せしものを陳列し、生徒各人の個性と實力との發揮に、意を注がれたるものなり。出品數五〇九にして、第四五學年は、主として細字特に〻ン字を課せられたり。今回の成績を學年別に、表記すれば左の如し。

學年	一等	二等	三等	等外	入選者總數	學年總人員	入選品總數	一人平均入選回數
第五	一	二	九	三四	四六	八三	九二	一、一一
第四	一	三	一二	三二	四八	九七	一〇七	一、一〇
第三	一	六	八	三二	四七	一二六	一二三	〇、九七
第二	一	五	八	四〇	五四	一三七	一三一	〇、九六
第一	一	一	六	二五	三三	一五〇	五六	〇、三七
計	五	一七	四三	一六三	三一八	五九三	五〇九	〇、八六

各學年に於て、最優等者を記せば、左の如し。

第五學年　北村　三郎
第四學年　有田　勝正
第三學年　林　不二雄
第二學年　富田　節夫
第一學年　上田　久之

我部展覽會の、他に優つて見受けられしは、陳列規則正しく、縦覽者をして、その優劣を容易に、判然たらしめ得たることなり。

されど此日來觀者少く、殊に、我部に足を止むる者の僅少なりしは、我々の遺憾とするところなり。將來、諸子の努力により、一般世人の、此道に缺乏せる趣味を喚起して、益々、我書道部の向上發展せんことを切望す。

（三浦不二夫記）

◎書道部記事

十月十八日、吾校創立記念日を卜して、運動會と、同時に開くべき吾が書道部の展覽會は、本年恰も學制頒布五十年に當るを以て、之の日を記念すべく、十月三十日、盛大なる成績品展覽會を開催せり。我が書道部諸子の光彩ある作品を見るもの、その非凡なるに驚歎の聲を發せり。其の中賞を得たるものを表記すれば、左の如し。

學年	一等	二等	三等	計
第五學年	一	三	九	一三
第四學年	一	四	一五	二〇
第三學年	一	五	一六	二二
第二學年	一	六	八	一五
第一學年	一	三	六	一〇
計	五	二一	五四	八〇

其の外家庭作品として出品せるものの中油繪に於て　五年長嶺君の柿、位置、形、色に於て熟練せる所を表せり。

二年三原品の風景、一種のタッチを有す。

五年　竹下、高尾兩君の風景。

水彩畫に於ては、四年　長濱君の花卉、末岡君の人物。

三年　大谷君の人物

二年　玉置君の菓物、田村君の柿、林君の菓物、佐伯君の人物、中村君の菓物、山縣君の柿。

特に觀覽者の目をひけり。來年は今一層の出品を望む。

（横山秀雄記す）

◎理科部記事

大正十一年十月三十日、我校は學制頒布五十年紀念事業として盛大なる展覽會を催し、午前八時より午後五時迄公衆の随意觀覽に供したり。

一、博物料は例年の如く主に公衆衛生、常識涵養を目的として、一部の標本を陳列するのみにて、卿が物足らざる寂寞の感有りたり。來年は一層の發展を期して止まず。

二、理化部は從來の形式的お務主義を打破して、理化學普及、智識の普及を目的として更に之を三部に分ちたり。

イ、生徒實驗室は公衆の日常生活に必要なる日用品の良否の鑑定法、及び實驗器具、對照表、一般必要の化學製造工程表並に其の標本、歐洲戰爭にて有名なる瓦斯製造、及び一般生徒の特製品を陳列せり。生徒の出品は昨年、否、過にし年のそれに比して驚くべき精巧、擬まざる苦心の迹見ゆたるは、我々の最も喜びとなす所なり。五年生の竹下、高橋兩君共作の萬國原子量表は粹中の粹と云はんか。又四年生の土田君のラシヤ鑑定法の圖解は眞に當を得しものと云ふべきなり。其の他四年生熊谷君、伊藤君、五年生木原君等の出品又見るべき物なりき。

ロ、理化學標本室を會場となし、我が理化學所藏の標本の解放、及地方出品の電話交換機、及天文用望遠鏡を陳列せしも、地方人に我意を解せられざりしは甚だ遺憾となす。

ハ、特別教室を以て會場となし、暗室送置をなし活動寫眞、X光線、眞空計、テスレルの電氣振動の實物實驗をなして、觀覽に供せしが、唯地方人の奇聲を發するのみにして、一人の反問者のなかりしは殘念なりき。

又生徒の特製に關する萩中ソース萩中齒磨粉及マルツ水の販賣をなせしに初めの試みとしては大成功なりき。

是の如く我等の展覽會は有意義に終りたり。又過去のそれに比して大なる發展をなしたり。こは生徒諸君の理化學に目覺めしものと云はざるべからず、嬉しい哉、いささか昨年の期待に報いたりと雖も尚足らず。希くは諸兄よ。理化學に趣味を持ちて發展を計られんことを。

（瀧口寛作記）

◎陸上運動會記事

十月十八日、第二十三回開校紀念運動會が擧行された。曉雨に氣遣はれた天候が、日の昇るに隨つて漸く霽れ、地は程よい潤さへ與へられて、却つて絶好な運動日、朝風に翻々たる校旗の下に、開校紀念歌を高唱すれば、六百の健兒が腕鳴る意氣！　氣愈々澄んで秋空遠く面影山の彼方に碧い。

午前十時、二百米を手始に、百碼、四百米、ロードルと、號砲につれて、競技はます〳〵進行し、第二十七回に至つて、中隊選手競爭となる。今年は各競技に各二人宛の選手を出して、その得点を總計して、中隊の優劣を極めることになつたのである。各選手は、ホップ、ステップ、ジヤムプ、走幅跳、走高跳、棒高跳ローハードル、砲丸投に夫々妙技を發揮した。就中走高跳の長濱君、伊藤君、棒高跳の岩田君、野村君、砲丸投の村木君は、特に際立つて見えた。

第五十一回乃至五回も亦選手競走で、百碼、二百米、四百米、八百米、千六百米の五種走技、第九十四回の選手リレーレースに於て木島君の拳獻天振りは驚歎の外なかつた。番外に小學校の選手リレーレースを行つたが、參加校は附近小學十數校、應援も振ひ小選手の雄々しい奮闘は見事な成績を示した。優勝旗は尋常科、高等科、共に明倫校が手にした。

凡て百回に餘る競技も、日頃の訓練と、各係の機敏な處置とに、さの澁滯をも來さず、豫定の五時には、遺憾なく終了し得た。終つて優勝旗は本日の優勝中隊——第四中隊に授けられ、校長の概評あり、校歌の合唱と萬歳三唱に目出度閉會した。

今年のこの運動會は三四年來、年毎に改善に改善を重ね來つたのを、更に斷然、オリムピック式に改め、競技の種類を選定し、ルールを嚴守し、各種競技の選手の得点を計算して、中隊の等級を定め、殊に個人の競技に於ても優劣をレコードによつて、極める

ことになつたのである。昨年までの如く、中隊の爭覇を、只四人の選手によつて決めることなく、又個人の得点を勝星に關係せしむることを廢したので、競技は一般的となり、且却つて自發的になり、體育の本旨に適ひ、競技の興味を誘起し得たと思はれる。尙この運動會に附近小學校の選手競走を加へ行ふのは、他校と競うて競技の興味と研究とを促し、競技協約を會得する、好機會を與ふるものと考へられる。

今回のこの運動會の改革は、多少試驗的な意味も含まれてゐると聞いたが、將來我校が、天下の舞臺に乘り出す準備は、必ず斯樣な競技會に俟たねはならぬ。幸に今回、この運動會を最も、有意義に成功せしめ得たを喜ぶのである。左に當日のレコードを掲げておく。

（Y、日、生記す）

ホップ	四米六二	村上　定介
走幅跳	五米四三	小野　基治
走高跳	五尺一寸	長嶺武四郎
棒高跳	八尺四寸	野村　久一
砲丸投	九米七九	村木　正七
百　碼	十秒五分の四	村上　定介
二百米	二六秒五分の四	小野　基治
四百米	一分〇秒五分の四	來島　勝男
八百米	二分二五秒	玉木　利夫
千六百	五分三〇秒五分の一	吉田　勇

◎武道寒稽古出勤狀況表

（甲）出席者一日平均數調

	年度	延人員	一日平均人員	部員數	百分比	期間
劍道部	大正九年	四二九三	一二六	二九一	七七	十九
	大正十年	三三七〇	一二四〇	三〇九	七七	十四
	增減	減九二三	增一四	增一八	同	
柔道部	大正九年	三四三〇	一八一	二三〇	七九	十九
	大正十年	二六五五	一八九	二五三	七四	十四
	增減	減七七五	八增	二三減	五	

（大正九年度全生徒每日平均七割八分　出勤期間十九日）
（大正十年度全生徒每日平均七割五分強出勤期間十四日）

（乙）皆勤者調

	年度	皆勤者數	部員數	百分比	精勤者數	百分比
劍道部	大正九年	一三五	二九一	四六	四一	一四
	大正十年	一四四	三〇九	四六	五三	一七
	增減	九增	一八同	增	一二增	三
柔道部	大正九年	一〇九	二三〇	四七	三〇	一三
	大正十年	一二二	二五三	四八	四〇	一五
	增減	一三增	二三增	一增	一〇增	二

（大正九年度全生徒ノ四割七分皆勤期間十九日）
（大正十年度全生徒ノ四割七分皆勤期間十四日）

◎各中隊學科成績表

學科成績を各中隊別により記すれば左の如し。（大正十年度第一學期以前は前號に掲載）

△大正十年度第二學期各中隊學科成績表

順位	中隊號	平均点
一	一	六九、四七
二	二	六九、四五
三	三	六九、三六
四	四	六九、二七

△大正十年度學年各中隊學科成績表

順位	中隊號	平均点
一	四	六九、五五
二	一	六九、四一
三	三	六九、二七
四	二	六九、〇三

△大正十一年度第一學期各中隊學科成績表

順位	中隊號	平均点
一	二	六八、二六
二	三	六七、四三
三	一	六七、一九
四	四	六六、八六

右の表に據るに、本第一學期の成績は各中隊共に著しく低下したるを見る。之を大正七、八年度に比較するに、九年度は七、八年度より低下したり。されば各中隊の成績は大正七年以來漸次低下したりといふを得、學生諸君は之を如何に感ずるか、大に奮勵を要すべきに非ざるか。

◎中隊幹部

第一中隊長　村上　定介
小隊長　益田　致義　玉木　利夫　頓野　孝夫
第二中隊長　木原　秀雄
小隊長　秋枝　純逸　岡　智敎　山中　茂
第三中隊長　岡村　誠
小隊長　柿並　武夫　三浦不二夫　小野　基治
第四中隊長　村木　正七
小隊長　稻田　保治　瀧口　寬作　田坂　遂次
旗手　藤田　孝麿
分隊長及旗手護衛は省略す

◎大正十一年度校友會役員

會長　岩田　校長
副會長　駒田　先生
劍道部　部長　岡部　先生
委員　下村　定儀　玉井　忠彦　箭島　薫　田邊竹次郎
山根　芳雄　中村　薫　石丸　孝一　守屋　眞雄

惠美須屋三吉　池田三郎　山縣　勝　小方　數馬
岸　音熊　山縣　定芳　櫻井小八郎　增山　清治
末成　寬　津森　剛

柔道部　部長　青野先生
委員　秋枝　純逸　村田　清男　村木　正七　堀上　孝助
長谷武四郎　北村　三郎　西村　秀隆　原　龍三郎
弘中　勝　竹內　六郎　佐伯　義治　林　不二夫
村木　喜八　永田宗一郎　守重　光雄　久保田繁二
有田　次郎　横山　剛熊

辯論部　部長　石川先生　副部長　土肥先生
委員　藤田　昇　鳥居　勝　山本　趙夫　古本　武男
岡　智教　鬼武　幹亮　山崎　正　井町　勇
松尾松千代　山本　浩　野村　久一　西山　磐
白上　章正　長濱　誠三　永見　眞人　伊勢屋泰禪
片桐　恒夫　內田　巽

書道部　部長　金子先生
委員　三浦不二夫　大橋　一夫　仁保　彌重　雄次
岡村　城　松崎彌太郎　有田　勝正　關　信常
井町　勇　多田　義男　鷲頭　亀治　堀　市熊
横山　幸生　大野捷二郎　吉田　勇　倉重　達郎
多田　利雄　瀧口　三郎　香川　俊男　岸　音熊
富田　節美　阿武　義輔　松井　利夫　吉村　理作
吉賀　一夫　青木　潤次　安部　實　時澤　信
中澤　銀市　天野　俊雄

書道部　部長　田總先生
委員　堀永忠次郎　和田　五郎　高尾日出彦　横山　秀雄
竹下　五郎　羽鳥　彌救　土田　伊平　長嶺　正博
伊藤　恒夫　板垣　肇　杉　丙三　三輪　公
阿武　四郎　高尾　延彦　大和　義男　吉田　勇
村上　景介　大谷　正信　小野　靜雄　伊東　武夫
河村　祥三　大島　政輔　中村　十郎　津田　秋雄
井上　昌夫　上田　久之　木村　利信　村木　七郎
小橋　一義　宮崎　三郎

雜誌部　部長　河野先生
委員　山中　茂　木原　秀雄　柿並　武夫　原　吉雄
瀧口　寬作　村上　定介　稻田　保治　頓野　孝夫
藤田　孝麿　土田　伊平　齋藤　彰　板垣　肇
大山　岩雄　育木　弘　來島　勝男

地歷部　部長　古川先生　副部長　森本先生
委員　島居　勝　小川　薰　田坂　遂次　迫山　六郎
大山　岩雄　堀永昌三郎　來島　俊雄　倉重　達郎
谷川　清　山田　明　大和　忠雄　松永　哲彦
小枝　清　柳井　敏三　久保　一郎

理化部　部長　村岡先生　副部長　田中先生
委員　下村　定儀　香川　義信　瀧口　寬作　村上　定介
伊藤　春雄　益田　致義　齋藤　彰　谷井　力
繩田　寬悟　津田　嚴男　杉　丙三　森田　誠

庭球部　部長　相島先生

委員　和田　五郎　柿並　武夫　彌重　雄次　磯村　彥一
桂　博　野村　要　田原　節夫　守重　眞雄
末岡　源七　清水　保一　山縣　勝　岩田　貞夫
山田　明　前原　壽一　守重　光雄　稻田　武夫
守重　信雄　永富　五郎

野球部　部長　船木先生
委員　堀永忠次郎　大橋　一夫　坪井　乘雄　久保田五六
北村　三郎　津崎平八郎　丸尾　誠二　平林三七雄
弘中　勝　平田　光雄　阿武　省三　長屋　修

漕艇部　部長　山本先生　副部長　相島先生
委員　河上　春亮　山根　次郎　村木　正七　堀上　孝助
玉木　利夫　堀　城　石丸　孝一　柳田　文雄
增野　忠　田中　豐　惠美須屋三吉　伊藤　貞一

器具係　係長　伊藤先生　副係長　鄉田　先生
委員　小野　基治　山中　茂　箭島　薰　中村　重藏
神代　龍口　原田　泰　迫山　六郎　三輪　茂
內藤　昌　大山　岩雄　進藤　研治　鹿島　國好

褒賞係　係長　藤井先生　副係長　中津江先生
委員　木原　秀雄　田中　信吉　原　吉雄　兼田　重德
波多野義貫　岡本　直一　谷井　力　福田　幹雄
池田　謙三

◎大正十年度校友會經常費收支決算書

一金壹千七百八拾參円五拾八錢　收入高
內譯
金百四拾壹円六拾四錢　前年度繰越金
金壹千四百參拾貳円七拾七錢　職員生徒會費
金貳百九円拾七錢　雜收入
一金壹千七百八拾參円五拾八錢　支出高
內譯
金百參拾九円九拾錢　劍道部
金百四拾円拾錢　柔道部
金六拾五円六拾錢　庭球部
金百拾四円八拾錢　野球部
金百八拾壹円五拾九錢五厘　短艇部
金拾參円四拾九錢　游泳部
金百四拾參円拾六錢　雜誌部
金貳円九拾錢　辯論部
金五円拾四錢　書道部
金壹円參拾錢　圖畫部
金貳百九拾八円五厘　運動部
金貳百貳拾六円四拾九錢　褒賞部
金參百六拾八円八拾錢五厘　雜費
金四拾円也　基金蓄積費
金四拾円也　短艇蓄積費

附錄

貳円貳拾九錢五厘
以上

大正十年度校友會基金收支決算書

一金五千九百拾九円九拾六錢
收入高
內譯
金四千五百六拾八円四拾九錢　前年度繰越金
金千參百五拾壹円四拾七錢　本年度實收高
內
金九百五拾參円五拾七錢　元阿武郡郷友會ヨリ寄附
金壹百円也　竹原安次郎氏寄附
金拾円也　田中照一遺族田中イシ氏寄附
金四拾円也　經常費ヨリ蓄積
金貳百四拾七円九拾錢　預金利子
一金五千九百拾九円九拾六錢
支出高
內譯
金七拾八円七拾錢　經常部運動費ヘ充用
金五千八百四拾壹円貳拾六錢　大正十一年度ヘ繰越
以上

大正十年度短艇蓄積費收支決算書

一金貳百七拾八円五拾貳錢
收入高
內譯
金貳百貳拾七円拾七錢　前年度繰越金
金四拾円也　經常費ヨリ蓄積
金拾壹円參拾五錢　預金利子

大正十一年度ヘ繰越

一金貳百七拾八円五拾貳錢
支出高
內譯
金貳百七拾八円五拾貳錢　大正十一年度ヘ繰越金
以上

◎寄贈雜誌　左記諸雜誌は、本會に寄贈せられたるものなり。厚く感謝の意を表す

學友會報　第六十七號　山口高等商業學校　校友會
美登里　第十二號　宇部高等女學校みどり學友會
校友會誌　第二十三號　德山中學校　校友會
會報　第三十號　大日本武德會本部
學友會誌　創刊號　名古屋高等商業學校學友會
南園會報　第九號　萩高等女學校　南園會報部
校友會報　第五號　山口高等學校　校友會
萩商　第三號　萩商業學校　校友會
早稻田學報　每號　早稻田大學　校友會
千里山學報　第四號　關西大學學報局
こみち　第八號　成蹊中學校
高千穗學報　第廿一號　高千穗學校
三田評論　每號　慶應義塾大學

附錄

同窓會記事

本號より同窓會記事の一欄を附載することとせり。固より校友會雜誌は、在校生の機關にして、同窓會員の機關にあらず。然れども先進卒業生が後進在校生を啓發誘導し、後進在校生が先進卒業生を敬愛思慕するは、我校美風の一たらずんばあらず。在校生が、卒業生の如何に社會的に活動しつゝあるかを知るは卒業後大に益する所あるべきを信ず。冀くは本欄を創設せる事の徒爾とならざらんことを。但恨むべきは紙數の都合と、始めての試みなりし爲め、材料の蒐集意の如くならざりしことなり。

高梁より

高梁中學校長　玉木正行

指折り數へて見れば今から二十年程前のことである。丁度日露戰爭の始まつた頃で、まだ私が學生時代であつたが、母校の校友會雜誌が出るから何か通信せよとのことであつたので、一文を草したことがある。學校を卒業してから廣島に四年、奈良に四年、大分に三年半、岡山に來てかれこれ四年の月日が經つた。そして今この山奥で再び校友會誌に通信を書くことゝなつた。

何を書いてよいか、書き度いことは山程あるが、そのためにどれを書いてよいか却つて迷ふ。が幸、親交ある同窓會員の消息をと云ふことも注文の一部にあるので、外の人よりは、私が割によく知つて居る友人のことを書いて見よう。但これは七八年前母校の構内にある圖書館で、ふと其頃の校友會雜誌を見たら、誰かの話が載つて居たが、それには大分事實の誤りがあつたやうに記憶するので、其訂正の意味も含める積りである。

それは兼常清佐君に關してゞある。同君は、日本音樂の研究者としては第一人者である。山口の高等學校（今の高等商業の前身）で理科をやり、卒業後半ヶ年程德山中學で物理化學の教授をした

ことがある。（教師の免許學科は英語）。その後京都の文科大學で希臘哲學を專攻し、大學卒業後は日本音樂の研究と云ふ頗る面白い經路をとつた人である。若し哲學の研究を續けて行つたならば優に一家をなしたことゝ思はるゝ。さう云ふわけで音樂の方面に向つたか、それを話すとながくなるからやめるが、音樂に對しては幼い時から趣味があつたのである。君が京大に居る頃、萩への往復の途次には必ず廣嶋の私の下宿に寄ることになつて居たが、其折りも種々音樂の話が出、君の作曲したものを示されたことも屢であつた。いよ〳〵音樂の研究に從事しはじめてからの熱心は非常なものであつた。東京音樂學校にある邦樂調査會の委員になつたこともある。同君の熱心な研究の態度や、いろ〳〵の逸話など、青年學生の參考となることが澤山あるが、成可く簡單にと云ふことであるから、今日は大体のことに止めて置かう。

兼常君は今獨逸に居る。君が歸朝後、其組織ある研究の發表せらるゝ日を、私は切に待つのである。

五高通信

同校　篠原智雄

拜啓金風颯々人に頁きの候と相成り候處皆々樣には愈々御清穆の段慶賀の至りに存じ奉り候。扨私事誠に烏滸の至りに候へども、第五高等校第一學年在學同窓生一同の近況、並に寮生活の概略を御報知申し上げ候。

本年當校に入學せし同窓生には、文科に吉武惠一君並に小生、理科に上野玉市、竹内忠雄の兩君あり四名とも目下寄宿舍習學寮内に起臥致し何れも元氣旺盛にて、學窓に親しみ居り候。習學寮は校の北部龍田山の翠緑を指顧の間に仰ぐ所にありて、第一、第二、第三、第四の四寮に分れ、總室數百六寮生約二百五十、創立當初より龍南の中心生命として、校風の盛衰一に之に懸り候。生活の根本は生徒自治にあり、各寮には生徒互選にて選擧せる六、七名の委員ありて、炊事、運動、圖書、衛生の事を掌り、委員の上には三年生の寮總代ありて、其の寮の全責任を負ひ、別に舍監あるも殆ど生徒の行動には干渉する事なく、各自の自覺に俟つて、自治の美果著々擧り居り候、誠に寮生活は高等學校生活中最も有意義なるものの一にして、著實なる勤勉の裏には時にストームの襲來あり、コムパあり、或は同窓生相集りて、往時を回想し、或は同氣相求むるの友と郊外に散策して、以て浩然の氣を養ふ等興味實に津々たるもの有之候。

そもそも我が五高たる位置を西鎭の中樞に占め、東には噴煙濛々たる大阿蘇の峯々を仰ぎ、西には不知火燃ゆる有明海を控へ、開校以來三十有五年、剛毅朴訥の校風は幾多の高等學校の間にありて、一頭地を抽でるもの、誠に男兒大に氣を養ふに適せるの所と言ふべく、小生等一同萩中出身者にして、吾校に學ばれん士の一人も多からん事を渴望して止まざる次第に御座候。頓首

十月十日

海軍に奉職中の會員

海軍大學に奉職中の會員阿武清君に、本會員にして海軍に奉職中の者の現況取調を依頼せしに、左記の通り回答ありたり。茲に謹んで同君の厚意を感謝す。

中佐	三戸基介	長門航海長	
同	阿武清	海軍大學校敎官	
同	山本吉德	第一艦隊副官	
同	佐古良一	待命（横須賀）	
少佐	山本松四	秋風驅逐艦長心得	
同	和田專三	比叡砲術長	
同	佐田健一	海軍大學校副官	
同	杉山俊亮	盤手砲術長	
同	田村能介	海軍砲術學校敎官	
同	寺田幸吉	明石砲術長	
同	能美留壽	富士運用長	
大尉	簑妻準二	伊勢分隊長	
同	安富芳介	旅順防備隊分隊長	
同	濱屋七平	驅逐艦萩乘組	
同	大谷雄介	八雲分隊長兼敎官	
同	驛元三郎	休職（吳）	
少尉	岡本義助	攝津乘組	
機關少佐	田坂信一	第三十三驅逐隊機關長	
同	伊藤一忠	橫須賀人事部々員	
同	佐々木竹四郎	矢矧分隊長	
機關大尉	三戸由彦	海軍大學校敎官	
同	木原直孝	對馬分隊長	
海軍少尉	谷村芳一	砲術學校學生	
同	後藤茂	驅逐艦有明乘組	
同	村田美穗	日向乘組	
同	藤村正亮	金剛乘組	
機關少尉	倉重義雄	伊勢乘組	
主計少尉	中村明德	經理學校學生	

少尉候補生　中村　敏雄　出雲乘組

同窓會誌

（自大正十年十一月一日　至大正十一年十月三十日）

名簿發行

會員名簿異動訂正及追加を發行し、一月中に會員全部に發送す。住所不明の爲めに符箋附にて、返送し來りしもの約百通あり。

新入會員歡迎會

三月三日、卒業式後寄宿舍道場にて開く。出席者岩田會長、舊卒業會員菊屋、末岡、金子眞一、山本、中津江、河野の六君、特別會員安藤、舟木、落合三先生及新入會員七十名。河野幹事開會の挨拶、新入會員總代吉武裏市君答辭、會長の注意希望あり。折詰菓子を饗し、歡談す。山本幹事發聲にて校歌を合唱し、萬歳を三唱して閉會す。

奬學賞贈與

三月三日、卒業式に當り優等生に、四月八日、始業式に當り同じく優等生に賞品を贈與す。詳細は校報欄參照ありたし。

評議員會

七月九日午後八時より、西田町尾笹旅館にて開催す。出席者菊屋厚東、和田、齋藤、長井、山本、河野の七氏、及會員中津江氏なり。岡、金子兩評議員は事故の爲め欠席。協議事項は基金募集之件、同募集規定、定期大會之件等なり。十二時閉會す。

第七回定期大會

八月八日午後七時、唐樋町高大亭に於て開催す。昨年の大會に於て、今後は夜間旅亭にて開かれたしとの希望ありしを以てなり。出席者左の如し。

岩田會長　頓野　山本(光二)土肥　村岡四特別會員
厚東(太郎)　和田　齋藤　長井　岡　金子　河野の七評議員
通常會員　黒瀬白　草刈稔　門田莊吉　田淵武彦　井上盛義
厚東晴二　澁谷辰　益田兼施　行本盛三　柴田健正　增山三郎
進藤郁治　國重爲人　武安明　中津江延彦　堀元介　恒石八郎
石原忠堯　松浦茂　岸田隆吉　末岡周介の二十一人

近年になき出席者多數なりしは喜ぶべし。岩田會長より、會員一同に對し一場の談話あり。會長は據なき用件ありとて早く席を外さる。斯くて議事に入る。會則改正の結果第三條に

本會ノ事業ヲ後援セル者ニシテ評議員會ノ推薦セル者ヲ賛助會員トス

の一項を加ふ。尚會務を進捗せしむる爲め、臨時に必要なる際は書記を雇ひ給料を拂ふを得るやう承認す。其の後會計報告ありて基金募集の件を附議す。可なりの議論ありし後滿場一致を以て可決す。且募集規定中一口拾円とありしを五円と改む。

幹事より夏季休業中開催する學生講演大會を後援すること、及母校々友會雜誌に寄稿せられたき等の希望あり。最後に評議員の改選あり。石原、黒瀬の二君を開票委員とし、開票の結果、厚東健次郎君の代りに中津江延彦君當選し、他は重任となれり。斯くて配膳に移り高歡放吟歡談に時を移す。十二時過散會す。

振替貯金加入

基金應募者の便宜を計り、九月十三日振替貯金に加入す。口座番號は下關七四九七なり。「ジチヨクナ」と記憶すべきか。

會員小集

十月七日、折から歸省中なりし岡村喜與君(第一回卒業)の招待に依り、特別會員頓野、田總、金子、相島の四先生、及評議員厚東山本、和田、長井、河野の五君、橋本富月亭に集合、基金募集の件に就き意見の交換をなす。岡村君より鄭重なる饗應あり。尚同君は種々本會の爲め斡施せられ、來るべき陸上運動會には賞品として靴下多數を贈る事を約せられ、母校生徒に安價にて日用品を購入せしむる爲め、靴、シヤツ等を送るやう計畫せらる。

基金募集に就て

本會が基金を募集せざれば、遠からずして破産するか、全く事業を中止するかの外なきに至るは、別項會員に送りし依頼狀、趣意書等にて明なるべし。基金募集の擧たる云ふは易くして行ふは難し。然かも今日迄に應募せられし諸君は、悉く本會に熱烈なる同情を寄せられ、或は種々激勵の辭を寄せらるゝなり。會員玉木正行君は、參考の爲めにとて高梁中學校の基金募集の詳細なる報告を送らるゝあり。或は某聯隊在營中の會員は、種々なる質疑を發せられて、幹部をして遑算なからしめんと期せらる。何れも感謝に堪へざるなり。左に會員一同に送りし依頼狀、及趣意書を掲ぐ。

依　頼　狀

拜啓初秋の候愈御清福の段奉賀候扨て別紙趣意書の通り本年八月八日の第七回定期大會に於て本會基金募集の件議決仕候間募集規定御熟覽の上何卒多少に拘らず御寄附被下度此段奉懇願候御承知の通り本會には會費の制度も無之唯入會の際僅に貳円の入會金を徴收するのみに御座候然るに會員名簿の發行のみにても毎年貳百円以上の費用を要するに入會金は毎年約百五六拾円に過ぎず斯くては名簿の發行すら不可能なるのみならず何等積極的の事業は成し得られざる狀況に御座候今後本會をして一層有意義に活動せしむるには第一に會計に餘裕あらしめざるべからずと存候何卒義俠なる會員各位の御同情を仰ぎ度奥々も御願申上候　敬具

尚今回基金募集の便宜を計り振替貯金口座に加入仕候間何卒御利用相成度相願候

大正十一年八月　　發起人一同

（姓名省略）

基金募集趣意書

教育のことは學校當事者のみに委すべきにあらず。必ずや社會一般が之を援助するにあらずんば其の効果を全うする能はざるべし

我が秩中學校は創立以來已に二十三年、本年三月は實に第二十二回の卒業生を出し、卒業生の數一千二百六十五人の多きに及べり。今此等多數の卒業生にして若し相團結して事を成さば一大勢力となるを得べし。我等は母校の事業を後援する爲め、一には卒業生同窓會の基礎を強固にする爲め、將又卒業生各自の利益幸福を增進する爲め、茲に卒業生各自の義俠心に訴へ、大に基金を募集せんとす、卒業生同窓會の創立以來已に七年、此の間同窓會の爲したる事業や少なりといふべからず。或は卒業生相互の懇親を計る爲に大會を開き、或は在校後進の學業を奬勵する爲に賞品を贈り、或は會員死亡者の追吊法會を行ひ、或は母校恩師に對して報本反始の禮を盡したり。然かも我等の事業は將來此のみに止むべからず。將來爲すべき事業は多々益々加はらんとす。或は會員名簿の發行に當りても年々部數も紙數も增加する爲、本會は其の資金の負擔に堪へざらんとす。現に昨年度より名簿の發行を隔年毎に行ふ事に改めたり。是本會幹部の本意とする所にあらず、或は母校々友會雜誌も本年度よりは卒業生の通信等を多く揭載して在校生との連絡を計らんとす。斯る事は單に母校々友會にのみ委すべきにあらず。同窓會も多少の資金を提供して之と協調を計らば一には母校の事業を裨補し一には卒業生相互の連絡をも計るを得ん。或は母校職員に對する報本反始の方法を設くるも其の一なり、母校後進者の學業運動を奬勵するに今一層徹底的の方法を設くるも其の一なり。卒業生相互の修養の方法を設くるも其の一なり。我等の爲すべき事業は屈指に遑あらざらんとす、あゝ多數は力なり、顧くは各位が熾烈なる贊助を得んことを。

會員統計

本年九月末日現在にて、本校にて純計せる結果左の如し。

創立以來卒業生總數　一千二百六十五人

修學中ノ者

帝國大學	二五	公立大學	四
私立大學	五四	高等學校	四七
各種專門學校	四九	陸海軍各學校	七
農科大學實科	三	木產講習所	一
遞信官吏練習所	三	師範學校二部	一
高等實業學校	四七		
計	二四一		

軍人トナレル者

陸軍將校同相當官	八八	海軍將校同相當官	二八
一年志願兵及兵役	一九		
計	一三五		

官公衙會社銀行等ニ就職ノ者

官吏	一〇三	公吏	六
會社	一八七	銀行	三五
陸海軍工廠	二	各種工場	四
船舶乘組	五		
計	三四二		

教員トナレル者

高等ノ學校	二	中等ノ學校	二四

小學校	五九		
計	八五		

實業ニ從事セル者

農業	一七	商業	五五
工業	二二		
計	八四		

其他

醫師	四二	藥劑師	六
新聞社員	四	畫家	一
神職僧侶	九	辯護士	二
外國渡航	五	修學準備中ノ者	九一
高等實業學校各種專門學校等卒業後目下ノ狀況不明ナル者			二九
計			一八九
目的未定及不詳ナル者			六〇
死亡			一二九

* * * *

大正八年以降四年修了者	三〇
特別會員(母校外)	一一六
內物故者	一四
特別會員(母校在職)	二七

大正十年度自十年八月一日至十一年七月二十日決算書

收入		支出	
金六五四、三八〇	繰越金	金七〇、〇〇〇	名簿代
金一七八、〇〇〇	會費八九人分	金一八、二四〇	同發送費
金二九、三六〇	預金利子	金六、二五〇	總會費
計金八六一、七四〇		金〇、九四〇	通信費
		金三七、〇〇〇	新入會員歡迎會費
		金一六、〇三〇	奬學賞品代
		金一、二〇〇	スタンプ代
		金八、〇〇〇	賞狀代
		金一、五〇〇	評議員會費
		計金一五九、一六〇	
差引殘金七〇二、五八〇			
內訳			
防長銀行定期預金二口分		金五六七、五八〇	
小口預金		金一三、〇三〇	
現金		金二一、九七〇	

會員訃報

大正十年十一月以後、會員の訃報に接したるもの左の如し茲に謹みて哀悼の意を表す。

寺田猪三郎君（第廿回卒業）　神宮皇學館在學中なりしが、大正十年十一月十一日病死。

白上貫之助君（第三回卒業）　長らく自宅にて病氣治療中なりしが、本年二月廿五日死去。

松本淳君（第三回卒業）　長く自宅にて病氣療養中なりしが三月十六日死去。

阿武莊君（第十九回卒業）　熊本高工電氣科在學中なりしが三月廿二日死去。

齋藤忠明君（第十回卒業）　五月三十一日死去。

内藤軍吒君（第二十二回卒業）　三月末より流行性寒冒に罹り、其後肋膜炎症、腹膜炎症併發、七月廿四日死去。

仁保重視君（第二十二回卒業）　九月八日死去。

赤川傳君（第二十回）　五高在學中、病を得、別府溫泉に靜養中なりしが、十月十二日死去。

兼田幸作君（第十六回卒業）　齒科醫開業中に病を得、歸宅療養中、十月二十三日死去。

中村誠一君（第七回卒業）　長らく病氣なりしが、十月廿二日死去。

△△編輯を終へて▽▽

校友會雜誌は生徒の文藝奬勵機關なりや、報道機關なりや、修養機關なりや、將又此の三者を兼ぬべきか、之を兼ぬべしとするも、何れを主とすべきか。之第一に編輯記者の頭腦に起りし問題なり。議論は種々あるべし、とにかく編輯者は本號に於て生徒の作文――それも常に紙面の狹隘なる爲めに僅に一學年に一、二人の外載するを得ざる作文――の掲載を見合はしたり。かの一度生徒の聞きたる講演筆記の如きも、材料はありながらも之を割愛したり。而して在校生と卒業生との連絡をとるといふ從來餘り注意せられざりし點に、新しき試みを創めぬ。

編輯を終ふるに當りて、所期の目的の達し得られざりしを見て、心ひそかに忸怩たると共に、生徒諸君に深く謝する所なり。然れども種子は蒔かざれば何の日か收穫のあるべき。本號はやゝ少しく異りたる種子を蒔きしのみ、之を培ひ、養ひ、實を結しむるは、後來の人を俟つべきのみ、（豫定通りの編輯締切の日、十月三十一日聖壽の無窮を祝しつゝ、編輯員記）

大正十一年十二月六日印刷
大正十一年十二月十日發行　【非賣品】

發行兼編輯者　山口縣阿武郡椿村　三輪勗

印刷者　山口縣吉敷郡山口町道場門前第九番地　大津いわ

印刷所　同上　山口響海館